

The Molecular Biology Society of Japan

MBSJ NEWS

日本分子生物学会

2011.2

No.98

会報

目次

■ 第17期理事長挨拶	1
■ 第17期 役員・幹事・各委員会名簿	3
■ 日本分子生物学会第11回春季シンポジウム 「分子生物学の明日 —金沢シンフォニー」のご案内	4
■ 第34回(2011年)日本分子生物学会年会開催のお知らせ(その1)	6
■ 第33回日本分子生物学会年会 年会報告	16
■ 研究倫理委員会・若手教育問題ワーキンググループ報告	17
■ BMB2010・男女共同参画企画 ランチョンワークショップ開催報告	24
■ 男女共同参画委員会・年会における発表者の属性統計調査報告	27
■ 第17期新理事会準備会議記録	28
■ 第16期第4回理事会記録	30
■ 第16期・第17期合同理事会記録	33
■ 平成23年度(第33回)通常総会記録	40
■ 平成22年度(2010年度)収支決算報告	43
■ 監査報告書	48
■ 平成23年度(2011年度)収支予算	49
■ 学術賞、研究助成の本学会推薦について	50
■ 研究助成一覧	50
■ 各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ ○第14回マリンバイオテクノロジー学会大会 ○第15回 国際分子・植物・微生物相互作用学会	53
■ 賛助会員芳名	55



特定非営利活動法人

日本分子生物学会

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/mbsj/>

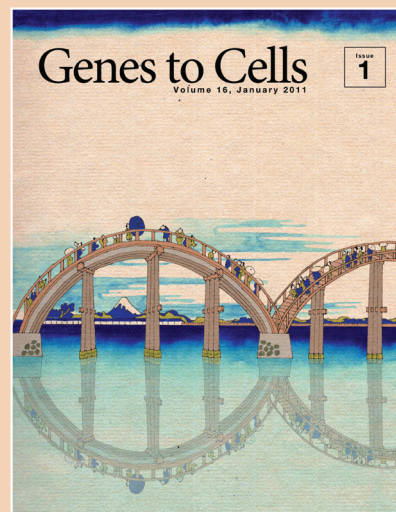
Genes to Cells

Published on behalf of the Molecular Biology Society of Japan

Edited by: Mitsuhiro Yanagida

Frequency: Monthly | Impact Factor: 2.952

日本分子生物学会の学会誌Genes to Cellsは、分子生物学の優れた研究成果を掲載し、著者にとって有益な学術情報や、先見性の高い最新の研究情報を提供しています。全世界4,000以上の機関で読まれており、年間12,000件以上のダウンロード数を誇ります。是非Genes to Cellsにご投稿ください。



Genes to Cells 投稿の利点

- わかりやすく便利なオンライン投稿システム
- 出版までの過程をお知らせするAuthor Servicesをご利用いただけます
- 早期出版EarlyViewサービスにより、最新号への収載を待たずにオンラインで出版されます
- 出版後6ヵ月経過した全論文が無償公開となり、世界中からアクセス可能になります
- 出版されると直ちに無償公開となるオープンアクセスオプション『OnlineOpen』（有料）をご利用いただけます

オンライン投稿はこちら
<http://mc.manuscriptcentral.com/gtc>

2009年出版 引用数TOP 論文 *2010年12月現在

Role of ornithine decarboxylase antizyme inhibitor in vivo

(Volume 14, Issue 3)

Tang H, Ariki K, Ohkido M, et al.

COUP-TFII regulates the functions of Prox1 in lymphatic endothelial cells through direct interaction

(Volume 14, Issue 3)

Yamazaki T, Yoshimatsu Y, Morishita Y, et al.

Roles of Sall4 in the generation of pluripotent stem cells from blastocysts and fibroblasts

(Volume 14, Issue 6)

Tsubooka N, Ichisaka T, Okita K, et al.

ジャーナル閲覧ページ

www.wileyonlinelibrary.com/journal/gtc

日本分子生物学会の会員はオンラインジャーナルに無料でアクセスしていただけます。

ユーザー登録は学会事務局までお申し込みください。

日本分子生物学会事務局: info@mbsj.jp

登録後のアクセスに関するご質問は、

Wiley-Blackwellカスタマーサービスにて承ります。

Wiley-Blackwellカスタマーサービス: cs-japan@wiley.com

 WILEY-BLACKWELL

第 17 期理事長挨拶

会員の皆様へ

昨年 10 月の新理事会準備会議において 17 期理事長に選任され、今後 2 年間本学会の運営を担当することになりました。日本分子生物学会のため、科学のために微力を尽くすつもりですので、どうぞよろしくお願いいたします。

日本分子生物学会は 1978 年に会員数約 600 名で発足しましたが、その後拡大を続け、現在では会員数 1 万 5 千人を超え、年会参加者も 8,000 名規模と生命科学系で最大の学会となりました。これは分子生物学が生命科学の爆発的發展の中核であったことを反映していると思います。また、分子生物学が研究の進め方の革新であったために、例えば遺伝子研究やゲノム研究等においても、常に他分野からの参加があったことがあります。同時に自由闊達な学会の雰囲気も大きいと思います。学会の前身である分子生物学シンポジウム（八王子セミナーハウスや武田研修所）では、駆け出しの学生と大先生が全く垣根なく深夜まで議論したことを覚えています。そのような雰囲気がまだまだ受け継がれていると思います。古いと言われるかもしれませんが、これは大事にしたいと思います。

今後の日本分子生物学会の課題に関しましては、16 期の将来計画検討委員会から提言も出されており、それに沿って進めていきたいと考えています。

1) 年会の充実

分子生物学会の最大の活動は年会（学術集会）です。上述したように、分子生物学は常に新しい研究戦略を開発し、他分野を取り込みさらに発展を続けてきました。分子生物学会では年会運営方針を年会長に任せて機動的に進められるようにしてきました。これにより、巨大な会ではありますが、様々な「実験」が可能になります。そして結果がよければ採用し、そうでなければやめる、といった風に続けてきたと思います。ある意味、いい加減とも言えますが、これはまさに「進化」そのもので、分子生物学会の特色を最大化するのによいやり方だと思います。このためには、高い見識をもった年会長にフリーハンドを与え、最大限のサポートをすることが重要だと思います。合同年会の是非の議論が続きましたが、将来計画検討委員会の提言に沿って分子生物学会のアイデンティティを失わないように進めていくべきと考えます。分子生物学会員の旺盛な好奇心を考えますと、むしろ別の様々な学会との連携も検討すべきだと思います。

2) 国際化

われわれ日本人は母国語で最先端の科学を学び研究できる稀有な国民です。これは楽ちんでありがたいことですが、昨今のグローバリゼーション特にアジア諸国の台頭の状況の中では決定的なマイナス要素になってきたと思います。もちろん単純に国際化＝英語化ではありませんが、分子生物学会の活動を国際レベルにするためには、外国からの参加や連携が必須ですので、英語化は避けて通れないと考えます。国際シンポジウム構想は今後の課題ですが、年会でのシンポジウムの一層の国際化は必要でしょう。各種アンケート調査では予想以上に消極的な声も多いのですが、日英両記など様々な工夫をして進める必要があると考えます。

3) 社会への対応

日本経済の低迷や社会の制度疲労の中、大学予算の減少や法人化、さらには少子化の流れを受けて、ポストク問題ははじめとする科学の推進にとって重大な問題が多々発生してきました。このまあいくと科学の後継者がいなくなり、日本の科学は減びるのではないかと、との強い危機感を抱きます。前 16 期には事業仕分け等への対応に忙殺されましたが、その中で、科学者からの社会への説明責任はもちろんとし、政策提言の必要性が指摘されてきました。学会の本来の任務はサイエンスですので、どこまで踏み込むべきかについては議論がありますが、分子生物学会らしい政策提言を考えてみたいと思います。16 期将来計画検討委員会での議論の申し送りもありますので、まずは中山敬一理事と篠原彰幹事に課題整理のコアグループ形成を依頼しました。その結果を受け、しかるべき委員会/WG を作って進めていきたいと考えています。当然、共通性の高い部分については学会連携や様々な組織との連携で進めていくことになると思います。

4) 委員会活動

学会活動の第二の柱である Genes to Cells 誌の編集出版業務については、柳田編集長と上村匡編集幹事の努力によって順調に進んでいますが、ワーキンググループにおいて引き続き同誌の今後の方向を議論していただきます。研究倫理委員会下部組織の「若手教育問題ワーキンググループ」は重要な活動として定着してきました。メンバーを更新しつつ継続して活動していただきます。「男女共同参画委員会」は活動範囲が拡大してきましたが、大学等での活動も増えていることから、内容の見直しをして進めていくことにします。前期に設置された「学術事業企画委員会」では企画出版の継続に期待したいと思います。最後に、「日本分子生物学会若手研究助成 富澤純一・桂子基金」運営委員会の活動が始まります。分子生物学会を信頼して寄託いただいた富澤先生のご意志を生かすべく、若手の優れた研究者の発掘・育成に努めたいと考えています。

以上、課題は多々ありますが、おおいに議論して進めていきたいと思っています。そのためにも会員の皆様のご協力とご支援、活動への積極的な参画をよろしくお願いいたします。

2011 年 2 月

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第 17 期理事長
(情報・システム研究機構 国立遺伝学研究所長)
小原 雄治

第17期 役員・幹事・各委員会名簿

(任期：2011年1月1日～2012年12月31日)

理事長

小原 雄治 (遺伝研)

副理事長

相沢 慎一 (理研・CDB)

大隅 典子 (東北大・医)

理事

阿形 清和 (京大・理)

五十嵐和彦 (東北大・医)

上田 泰己 (理研・CDB)

影山龍一郎 (京大・ウイルス研)

後藤由季子 (東大・分生研)

塩見 春彦 (慶應大・医)

杉本亜砂子 (東北大・生命)

谷口 維紹 (東大・医)

永田 恭介 (筑波大・人間総合科学)

鍋島 陽一 (先端医療財団先端医療センター)

花岡 文雄 (学習院大・理)

水島 昇 (東医歯大・医歯)

柳田 充弘 (京大/沖縄科学技術研究機構)

米田 悦啓 (阪大・生命機能)

審良 静男 (阪大・IFReC)

石川 冬木 (京大・生命)

貝淵 弘三 (名大・医)

五條堀 孝 (遺伝研)

小安 重夫 (慶應大・医)

白髭 克彦 (東大・分生研)

田中 啓二 (都臨床研)

月田早智子 (阪大・生命機能)

中山 敬一 (九大・生医研)

西田 栄介 (京大・生命)

三浦 正幸 (東大・薬)

宮園 浩平 (東大・医)

山本 雅之 (東北大・医)

(50音順)

監事

勝木 元也 (自然科学研究機構)

町田 泰則 (名大・理)

幹事

庶務幹事 石野 史敏 (東医歯大・難治研)

会計幹事 塩見 春彦 (慶應大・医)

編集幹事 上村 匡 (京大・生命)

広報幹事 荒木 弘之 (遺伝研)

篠原 彰 (阪大・蛋白研)

集会幹事 柳澤 純 (筑波大・TARAセンター/第34回年会) (第35回年会組織委員より1名、就任予定)

Genes to Cells 編集長 柳田 充弘 (京大/沖縄科学技術研究機構)

Genes to Cells 将来計画ワーキンググループ

荒木弘之、林 茂生、平岡 泰、宮園浩平

賞推薦委員会

小安重夫 (委員長)、相沢慎一、石川冬木、大隅典子、水島 昇

研究助成選考委員会

西田栄介 (委員長)、五條堀孝、月田早智子、三浦正幸、山本雅之

男女共同参画委員会

杉本亜砂子 (委員長)、塩見春彦 (副委員長)、井関祥子、漆原秀子、大杉美穂、佐藤 健、篠原美紀、原 英二、本間美和子

研究倫理委員会

花岡文雄 (委員長)、岡田清孝、田中啓二

〈研究倫理委員会下部組織〉

若手教育問題ワーキンググループ

白髭克彦 (WG座長)、上村 匡、後藤由季子、小林武彦、斎藤通紀、塩見美喜子

学術事業企画委員会

永田恭介 (委員長)、伊藤耕一、稲田利文、入江賢児、塩見春彦、島本 功、

菅澤 薫、中尾光善、林 茂生、三浦正幸、渡邊嘉典

「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子 基金」

基金運営委員会 (任期：2010年10月1日～2014年12月31日)

山本正幸 (委員長)、岡田清孝 (副委員長)、阿形清和、近藤 滋、塩見美喜子、嶋本伸雄、谷口維紹、小原雄治 (職指定委員)

日本分子生物学会第11回春季シンポジウム「分子生物学の明日 —金沢シンフォニー」のご案内

日本分子生物学会第11回春季シンポジウム「分子生物学の明日 —金沢シンフォニー」を新緑の金沢で開催いたします。我が国のトップサイエンティストの方々に
お集まりいただき、魅力あるセッションを組みました。
オーケストラ・アンサンブル金沢の本拠地である石川県
立音楽堂で、様々な分野の研究者が奏でるシンフォニー
をお楽しみください。

本シンポジウムのねらいは、若いも若きも、広く分子
生物学に関わる皆さんに北陸の地にお集まりいただき、
交流を深めていただくことです。そのため、ひとつの領
域に偏ることなく、できるだけ広くテーマを設定し、そ
れぞれの分野の最先端でご活躍されている研究者の方
々に講演をお願いしました。また、その準備には、金沢
大学がん研究所を中心に、理学、工学、薬学、医学系の
多くの先生方にご協力いただきました。周辺の学部学生、
大学院生などを巻き込み、分子生物学を支える研究者が
活発に交流できる場となれば幸いです。

今回のシンポジウムでは、金沢大学がん研究所が主催
する金沢国際がん生物学シンポジウムを組み入れ、海外
からの研究者をお招きし、International Session として
がん生物学の話題を提供します。関係各位の承諾を得て、
日本分子生物学会と金沢大学との共催という形で開催さ
せていただきたくことといたしました。金沢らしい楽し
いプログラムも準備しております。参加して決して損は
しない、という企画にいたしますので、全国から多く
の方の来訪をお待ちしております。金沢観光と一緒に楽し
みください。

参加登録や演題登録など、詳細は下記のウェブサイト
よりご確認ください。

[http://www.kanazawa-u.ac.jp/~ganken/
mbsj-spring2011/index.html](http://www.kanazawa-u.ac.jp/~ganken/mbsj-spring2011/index.html)

【春季シンポジウム】

テーマ：「分子生物学の明日 — 金沢シンフォニー」

会 期：2011 年 5 月 25 日(水)～ 26 日(木)

会 場：石川県立音楽堂 交流ホール（金沢市）

参加費：無料

参加登録：当日、会場での参加登録も可能ですが、円滑
な入場手続きを行うために、シンポジウム
ホームページから事前登録をお願いいたし
ます。

懇親会：2011 年 5 月 25 日(水)セッション終了後
（一般 3,000 円、学生 1,000 円）

特別講演：長田 重一（京都大学大学院医学研究科・教授）
「細胞死から新しい発展をめざして」
鍋島 陽一（財先端医療振興財団先端医療
センター・センター長）
「Klotho によって紡がれた生命の糸を解きほぐす」

招待講演：小安 重夫（慶應義塾大学医学部）
熊ノ郷 淳（大阪大学大学院医学系研究科）
吉村 崇（名古屋大学大学院生命農学研究科）
平山 順（東京医科歯科大学難治疾患研究所）
山内 敏正（東京大学大学院医学系研究科）
箕越 靖彦（自然科学研究機構生理学研究所・
総合研究大学院大学生命科学研究科）
井上 和秀（九州大学大学院薬学研究院）
植田 弘師（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科）
眞貝 洋一（京都大学ウイルス研究所）
古関 明彦（理化学研究所免疫・アレルギー
科学総合研究センター）
後藤由季子（東京大学分子細胞生物学研究所）
高柳 広（東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科）
濡木 理（東京大学大学院理学系研究科）
中山 敬一（九州大学生体防御医学研究所）
原 英二（財団法人癌研究会癌研究所）
水島 昇（東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科）

International Symposium on Tumor Biology in Kanazawa :

Chiaki Takahashi (Cancer Research Institute,
Kanazawa University,
Japan)

Ye-Guang Chen (Tsinghua University, China)

Yoshiaki Ito (National University of Singapore,
Singapore)

Brendan Jenkins (Monash University, Australia)

Dingzhi Wang (MD Anderson Cancer Center, USA)

演題募集：一般演題（ポスター発表のみ）を募集します。

募集期間は、平成 23 年 3 月 1 日— 4 月 15 日
です。たくさんの方の演題をお待ちしております。

【市民公開講座】

テーマ：「高校生のための分子生物学：
金沢 21 世紀美術館でサイエンス！」

日 時：2011 年 4 月 24 日(日) 14:00～16:30

会 場：金沢 21 世紀美術館 シアター 21

定 員：150 名

講 演：小出 五郎

(科学ジャーナリスト・元 NHK 解説委員)

「名画に見るこことからだ―科学者の目、芸術家の目―」

近藤 滋 (大阪大学大学院生命機能研究科・教授)

「波が作る生物の模様と形―生物と数学の不思議な関係―」

世話人：平尾 敦 (金沢大学がん研究所、平成 23 年 4 月よりがん進展制御研究所に名称変更)

主 催：特定非営利活動法人日本分子生物学会 / 金沢大学がん研究所

後 援：金沢国際がん生物学会、金沢大学十全医学

会、文部科学省特別経費 (がんの細胞社会学の創出事業)、日本学術振興会若手インターナショナル・トレーニング・プログラム (ITP)

事務局：(お問い合わせは、できるだけ、E-mail でお願
いします)

〒 920-1192 石川県金沢市角間町

金沢大学がん研究所 研究協力係

TEL.076-264-6700 FAX.076-234-4527

シンポジウム専用 E-mail：

mbsj2011@adm.kanazawa-u.ac.jp

第34回日本分子生物学会年会 開催のお知らせ（その1）

分子からヒトへ ―メカニズムを知り、コントロールする―

会 期：2011年12月13日(火)～16日(金)（4日間）

会 場：パシフィコ横浜

年 会 長：花岡 文雄（学習院大学 理学部）

演題登録期間：2011年8月1日(月)～8月26日(金)予定

事前参加登録期間：2011年8月1日(月)～10月28日(金)予定

＊サーバーメンテナンス等の関係で前後する可能性もあります。

年会事務局連絡先：第34回日本分子生物学会年会事務局（㈱エー・イー企画 内）

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-2-8 昭文館ビル3階

Tel：03-3230-2744 Fax：03-3230-2479 E-mail：mbsj2011@aeplan.co.jp

年会ホームページ：<http://www.aeplan.co.jp/mbsj2011/>

【年会の企画コンセプト】

二年ぶりの単独開催となる第34回年会(MBSJ2011)は、「基礎研究と応用研究の基軸としての分子生物学」をテーマに、上記のキャッチコピーのもとプログラムを企画いたします。

また、本年会組織委員会は、拡大を続ける本学会の今後の在り方を考え、科学的な成果の分かり易い発信の視点から、またますます細分化しつつある研究状況に活路を拓くなどの視点から、年會を今までのプログラムとは異なる構成で進めることとしました。

その要点は、期間中の各日で、いくつかのテーマをくくった研究集會が複数並行して進行し、それぞれは一定の完結性を持った研究集會のように運営されるというようなイメージです。テーマの単位は、例年、年會の一般演題募集時に用いられてきた次の6つの大きな項目とします。

1. 分子構造・生命情報
2. 分子・複合体の機能
3. 細胞の構造と機能
4. 発生と再生および神経科学
5. 疾患生物学
6. 分子生物学的方法論、技術

上記の各大項目（以下「フレーム」と記載）の小項目ごとにプログラム委員を配置しており、これらのプログラム委員がフレームごとに、シンポジウム、ワークショップ、口頭発表の企画を立てていきます（大項目・小項目については13頁の『プログラム分類一覧』をご参照ください）。

◎シンポジウムは、小項目横断的な、あるいはフレーム横断的な内容になることが期待されます。

◎ワークショップは、個々のディシプリンや関連研究分野に焦点をあてたものとなります。また、視点を絞った横断型も可能です。

◎口頭発表は、ポスター発表演題の中から小項目ごとに採択することとします。口頭発表についても、プログラム委員の判断で企画性をもたせる工夫も可能とします。

シンポジウム・ワークショップは、後述のように一部プログラム委員が企画するものもありますが、多くは従来どおり会員の皆様からの提案より選抜する予定です。また、本年会においては、男女共同参画の実現と若手研究者の育成に

も力を入れるという方針から、女性研究者や若手研究者をできるだけオーガナイザーやスピーカーに積極的に取り入れたいと考えております。さらに、前回の単独年会である 32 回年会を引き継ぐ形で、可能な限り英語を推奨する予定です。

シンポジウム・ワークショップの企画のみならず、口頭・ポスターによる一般演題発表等による会員の皆様の積極的な年会ご参加をお待ちしております。

【プログラム概要】

◆ Leading Edge セミナー（仮称）

ここ数年、顕著な業績をあげている研究者による特別講演を開催します。

◆ Early Bird セミナー（仮称）

我が国の分子生物学研究において偉大な功績を残された先輩方に、裏話を含めて研究秘話を語っていただきます。

◆ シンポジウム・ワークショップ

下記のように、組織委員会による指定企画のほか、会員より募集し採択された公募企画とあわせ、約 65 テーマを開催します。募集要領は後述の『シンポジウム・ワークショップ企画公募について』をご参照ください（公募締切：3 月 25 日(金)）。

1. 分子構造・生命情報

指定シンポジウム

細胞を創ることを目指した遺伝子ネットワークの構成的研究とその基盤技術

オーガナイザー：木賀 大介（東京工業大学）・野地 博行（大阪大学）

「細胞とはなにか」という基本命題に関して、これまでの生命科学に多く見られた、様々な生体分子の探索と解析という研究手段に対する相補的なアプローチとして、生体分子を組み合わせる構成的なアプローチがより広範囲に可能になってきている。本シンポジウムでは、細胞内の遺伝子ネットワークについての構成アプローチについて、理論と構築実験、および、結果の詳細な解析を可能にしている生体分子デジタル計数法といった技術的側面から紹介する。

細胞内共生オルガネラの機能を司る分子機構の多様性と進化

オーガナイザー：野崎 智義（群馬大学）・橋本 哲男（筑波大学）

近年、原生生物（プロティスト）に関する研究の進展に伴い、ミトコンドリアや色素体の機能を司る分子機構の多様性が明らかになってきた。しかも、真核生物の分子系統に関する知見の蓄積と相まって、これらオルガネラの機能進化を系統樹に沿って議論できる段階となっている。そこで本シンポジウムでは、ミトコンドリアや色素体さらにはそれらの退化型オルガネラであるヒドロゲノソーム、マイトソーム、アピコプラストなどの機能解析や比較生物学・進化の分野で先駆的な研究を展開しているシンポジストの講演と討論を通して、オルガネラの機能進化とそれが駆動する真核細胞進化の分子基盤解明に向けた研究の将来を展望する。

公募シンポジウム

次の小項目に関するシンポジウムの提案を 2 件公募します。できれば小項目 2 種以上含む横断的なご提案をお願いします。

（小項目：「遺伝子・核酸・ゲノム構造」、「オミックス」、「ポストゲノム解析・バイオインフォマティクス」、「タンパク質立体構造」、「分子進化」、「糖・脂質」、「分子構造・生命情報」に関するテーマ全般）

公募ワークショップ

次の小項目に比較的特化したワークショップの提案を 4 件公募します。

（小項目：「遺伝子・核酸・ゲノム構造」、「オミックス」、「ポストゲノム解析・バイオインフォマティクス」、「タンパク質立体構造」、「分子進化」、「糖・脂質」、「分子構造・生命情報」に関するテーマ全般）

2. 分子・複合体の機能

指定シンポジウム

ゲノムダイナミクス：維持と変換の分子ネットワーク

オーガナイザー：高田 穰（京都大学）

ゲノム DNA が、DNA 複製と細胞分裂を繰り返しても高い正確性によって維持されることは、あらゆる生命の根幹に関わる現象である。一方、減数分裂などの生理的なプロセスや、疾患をもたらす病的な状況において、ゲノムはしばしばダイナミックに展開し、その姿を変換してゆく。近年このようなゲノムダイナミクスを支える分子ネットワークの解明が急速に進んでいる。本シンポジウムは、この分野の第一線の研究者に様々な視点からの最新研究成果を提示いただき、ゲノムダイナミクスへの理解を深めることを目的とする。

クロマチン制御のネットワーク構造と動態

オーガナイザー：五十嵐 和彦（東北大学）・加藤 茂明（東京大学）

クロマチンは、転写や修復などの反応場として臨機応変にその構造が変換される。この制御に関わる複合体が多数同定され、複合体がモジュール的に組み合わせり、ダイナミックな制御ネットワークを形成することが明らかになりつつある。本シンポジウムでは、生化学と遺伝学を駆使したネットワーク解析を進めている研究者が集まり、クロマチン制御のネットワークとそのダイナミクスを討論する。

エピゲノムの静と動 - 維持、形成、リプログラミング

オーガナイザー：牛島 俊和（国立がんセンター）・中尾 光善（熊本大学）

エピゲノムは、体細胞分裂を経ても安定に継承されるという静的な性質と、分化やリプログラミングに際してダイナミックに変化するという動的な性質を併せ持つ。安定に継承するために、エピゲノムを効率よく複製する仕組みが明らかになってきている。一方、分化に伴うエピゲノム変化については、ゲノム領域毎の変化の順序、その意義や制御機構が解明されてきている。また、特定の細胞外シグナルはエピゲノム変化を誘導する能力をもち、その仕組みが明らかになってきている。細胞リプログラミングに際しては、エピゲノムが正しく書き直されるかどうかはその成否を握るとも言える。本シンポジウムでは、エピゲノムの静と動を捉え、鍵となるエピゲノム修飾やその制御機構を討議したい。

RNA ワールドの残存

オーガナイザー：塩見 春彦（慶應義塾大学）

進化における『RNAワールド』仮説、つまり、RNA が触媒と遺伝物質として両面の役割を担う原始的単純な世界から、『RNA/タンパク質（RNP）ワールド』を経て、現在の『RNA/DNA/タンパク質ワールド』へと進化したとする仮説は、近年、リボソームを構成する rRNA がペプチド鎖形成を触媒する（Ribosome is ribozyme）ことが明らかとなったことでさらに支持された。『RNAワールド』仮説をさらに検証するためには、『RNAワールド』の残存と思われる「それ自身が機能を持つ RNA 分子」を現在の生物のゲノムに見いだすことが重要である。ダーウィンの進化論では、複雑な複合体（例：Ribosome, Spliceosome 等）はそれがどのようなものであれ、偶然新規に（by chance de novo）出現することは決してありえない。したがって、多くの機能的中間体が存在するはずである。本シンポジウムでは、そのような中間体またはその名残を留めるとと思われる機能性 RNA や機能複合体の存在を明らかにする研究に焦点をあてる。

公募シンポジウム

シンポジウムでは基本的な生命現象を分子のレベルで捉え、その機構について論議します。前述の指定シンポジウムに加えて、4 件のシンポジウムを公募します。特に、小項目の枠、あるいは大項目の枠をも超えた分野横断的なシンポジウムを歓迎します。シンポジスト（5～6 名）の少なくとも 1 名は海外から（出来れば 2 名以上）招聘し、英語での発表・議論をお願いします。

（小項目：「複製」、「組換え・修復・変異」、「転写」、「翻訳」、「エピジェネティック制御」、「RNA の機能・RNA プロセッシング」、「生理活性物質」、「分子・複合体の機能」）

公募ワークショップ

ワークショップでは最近のトピックスを盛り込み、基本的な生命現象の分子機構を議論する提案を7件募集します。特に、実験を直接進めている若手の発表者を多く含んだ提案や若手オーガナイザーによるものを歓迎します。また、新たな分野の創成を指向するような提案も歓迎です。

(小項目:「複製」、「組換え・修復・変異」、「転写」、「翻訳」、「エピジェネティック制御」、「RNAの機能・RNAプロセッシング」、「生理活性物質」、「分子・複合体の機能」)

3. 細胞の構造と機能

公募シンポジウム

次の小項目に関するシンポジウムの提案を4件ほど公募します。

(小項目:「核内構造および機能・ゲノム機能(染色体・クロマチン・核小体)」、「細胞質オルガネラの構造・機能・形成」、「細胞接着・細胞運動・細胞外基質」、「タンパク質のプロセッシング・輸送・局在化」、「生体膜・細胞骨格」、「細胞増殖・分裂・周期」、「シグナル伝達」、「細胞死」のほか、「細胞の構造と機能」に関するテーマ全般)

公募ワークショップ

次の小項目に関するワークショップの提案を11件公募します。

(小項目:「核内構造および機能・ゲノム機能(染色体・クロマチン・核小体)」、「細胞質オルガネラの構造・機能・形成」、「細胞接着・細胞運動・細胞外基質」、「タンパク質のプロセッシング・輸送・局在化」、「生体膜・細胞骨格」、「細胞増殖・分裂・周期」、「シグナル伝達」、「細胞死」のほか、「細胞の構造と機能」に関するテーマ全般)

4. 発生と再生および神経科学

指定シンポジウム

神経幹細胞の分子生物学

オーガナイザー:岡野 栄之(慶應義塾大学)・後藤 由季子(東京大学)

脳の発生においては、多様な分化ポテンシャルを有する神経幹細胞の対称性及び非対称性分裂、分化の適切な制御により、種々の細胞が適正に産生される。胎生期および成体の神経幹細胞を制御する分子メカニズムの解明は、脳の正常な構築原理や記憶・学習や損傷修復のメカニズムの解明ばかりではなく、脳疾患の病態解明や再生医療への基盤としても非常に重要である。本シンポジウムでは神経幹細胞研究の最先端の知見を紹介したい。

Epigenetic control of animal development and organogenesis

オーガナイザー:竹内 純(東京大学)・武田 洋幸(東京大学)

多細胞生物の発生、成長の過程で、細胞は自分のヒストリーを記憶する。この現象は発生学の重要な問題であり、ゲノムDNAやヒストンに対する化学修飾、いわゆるエピジェネティックな制御が重要であることがわかってきた。本シンポジウムでは、分子生物学、ゲノム科学を駆使してこの問題に取り組む国内外の研究者(J. Wysocka 博士他)に最新の成果を紹介してもらい、発生におけるエピジェネティック制御の役割を議論したい。

公募シンポジウム

「発生と再生および神経科学」では、前述の2つの指定シンポジウムを予定しています。この他に2件のシンポジウムを公募いたします。受精から形態・器官形成、再生そして脳・神経の機能・発生に関わる最先端でかつ広がりのあるシンポジウムの提案をお待ちしています。

公募ワークショップ

「発生と再生および神経科学」では、6件のワークショップを予定しています。次の小項目に比較的特化したワークショップの提案をお待ちしています。

(小項目:「脳・神経」、「器官形成・形態形成」、「再生」、「幹細胞」、「細胞分化」、「受精」、「生殖細胞」、「神経発生」)

5. 疾患生物学

指定シンポジウム

単一遺伝性疾患とエキソームシーケンス

オーガナイザー: 井ノ上 逸朗 (東海大学)

次世代シーケンサーの進歩とともにエキソームシーケンスが比較的安価で可能となり従来想定しない単一遺伝性疾患が解明されている。パーソナルゲノム研究へのパラダイムシフトを概観する。

公募シンポジウム

本項目関連のシンポジウムを3件公募します。特に次の点に着目した提案を優先します。

- ・免疫・感染では病原体の分子生物学ではなく、宿主との相互作用を強く意識した分子生物学。
- ・ストレス応答反応と老化関連疾患。
- ・がんの分子生物学 (動物モデル、治療抵抗性、転移浸潤)。
- ・精神神経疾患の根本治療へのアプローチ。
- ・慢性疾患の分子生物学 (慢性炎症、エピジェネティクス、骨格筋代謝、肝臓代謝)。

公募ワークショップ

本項目関連のワークショップを5件公募します。特に次の点に着目した提案を優先します。

- ・免疫・感染では病原体の分子生物学ではなく、宿主との相互作用を強く意識した分子生物学。
- ・ストレス応答反応と老化関連疾患。
- ・がんの分子生物学 (動物モデル、治療抵抗性、転移浸潤)。
- ・精神神経疾患の根本治療へのアプローチ。
- ・慢性疾患の分子生物学 (慢性炎症、エピジェネティクス、骨格筋代謝、肝臓代謝)。

6. 分子生物学的方法論、技術

指定シンポジウム

新たな核酸工学による生命機能の解明と改変の新展開

オーガナイザー: 鈴木 勉 (東京大学)・稲田 利文 (東北大学)

核酸は、遺伝情報の貯蔵、伝達やタンパク質の合成を担う重要な生体情報分子である。最近、低分子 RNA に代表される核酸の新たな機能が次々と発見され、RNA 質量分析や核酸の選択的可視化などの新規手法による新たな機能の解明も進んでいる。また核酸は、きわめて多様な構造と機能を有する機能性分子であり、新しい構造と機能をもつ人工核酸を自由自在に化学合成する新規技術が続々と開発されている。この様な、DNA・RNA 工学による生命機能の解明と改変の新展開について紹介する。

タンパク質設計の現状と未来

オーガナイザー: 山岸 明彦 (東京薬科大学)、肥後 順一 (大阪大学)

タンパク質や酵素の設計は、これまで立体構造と物理的理論に基づく方法や進化分子工学的な選択によって行われてきた。両者とも多くの成果を生み出しているが、意図的な設計とはまだ言えない段階である。近年、データベースに蓄積した情報を利用した設計法も開発されつつある。これらの方法では、一次配列を利用したり、三次構造データベースを利用したタンパク質設計法が行われる。さらに、全原子をモデル化して計算機上で構造を推定する方法も急速に進展し、立体構造推定も可能になりつつある。こうしたタンパク質設計法の現状を確認し未来を俯瞰する。

公募シンポジウム

分子生物学の発展は、これを支える方法論および技術の著しい進歩に支えられて、更に加速されつつあります。本項目では、「新たな核酸工学による生命機能の解明と改変の新展開」、「タンパク質設計の現状と未来」

という2つのシンポジウムが計画されていますが、これらに加えて、細胞工学・発生工学、ケミカルバイオロジー、病因解析・診断などの分野における新規な方法論・技術に焦点を当てたシンポジウムの企画を1件公募します。

公募ワークショップ

分子生物学の発展は、それを支える方法論・技術の進歩に支えられてきました。この分野の今後の更なる展開も、新規な実験方法・技術の開発に大きく依存しています。「分子生物学的方法論・技術」では、DNA・RNA工学、タンパク質工学、細胞工学・発生工学、ケミカルバイオロジー、病因解析・診断、その他関連する分野において、今後の発展が期待される方法論・技術に焦点を当てた先端的なワークショップの企画を3件公募します。

◆一般演題（口頭・ポスター）

本年会では、例年以上に口頭発表の機会を増やしました。若手・学生による演題も多く採択したいと考えております。また、分子生物学会の特色でもある「ポスター会場の温度を上げるほど白熱するポスターセッション」も期待しております。6月発行の次回会報（99号）および年会ホームページにて募集要項を掲載し、8月1日（月）には演題投稿を開始いたします。なお、演題の登録には、日本分子生物学会の会員であることが必要です。未入会の方はお早めに入会手続きをお済ませください。

◆フォーラム

今年も、分子生物学分野のみならず、社会との関連が深い企画を「フォーラム」と位置づけて、会員の皆様より公募する予定です。6月発行の次回会報（99号）および年会ホームページにて募集要項を掲載いたしますので、しばらくお待ちください。

◆バイオテクノロジーセミナー

応用研究を行っている企業によるランチョンセミナーを開催します。

◆市民公開講座

「社会への説明責任」を果たすべく、市民の方々を対象とした公開講座の開催を予定しております。

◆その他企画（男女共同参画シンポジウム、研究倫理・若手教育シンポジウム等）

【シンポジウム・ワークショップ企画公募について】

年会では、シンポジウムおよびワークショップの企画を会員の皆様より公募いたします。ご提出いただいた企画案は、応募されたフレームのプログラム委員により厳正なる審査を行い、採否を決定いたします。採否結果は4月中旬頃に応募者へご連絡いたします。

13頁に記載の各大項目におけるシンポジウム・ワークショップ公募概要、および下記の募集要項をご確認のうえ、奮ってご応募ください。特に女性研究者や若手研究者による積極的な提案を歓迎します。魅力あふれる企画をお待ちしております。

◆シンポジウム募集要項

- ・企画提案いただくオーガナイザー（1人あるいは2人）は、日本分子生物学会の会員に限りします。
- ・1テーマあたり100分程度の時間枠で、約15テーマを採択します。
- ・海外演者を1名招聘する場合は20万円、2名以上招聘する場合は30万円を旅費・滞在補助費として支給します。また、海外演者の会期中の宿泊（会場より徒歩5分のナビオス横浜を予定）は、年会本部で用意します（この宿泊費は年会が支出し、上記補助費には含まれません）。
- ・国内演者については、旅費・滞在費・宿泊費の支給はありません。ただし、非会員演者の参加費は免除とさせていただきます。

- ・学会の国際化に鑑み、海外演者の有無に関わらず、全てのシンポジウムは「英語」で講演・質疑応答を行っていただきます。
- ・8月末の演題投稿後に予定されるプログラム編成スケジュールが大変タイトなため、提出物等の締切厳守を予めご了承ください。

※公募シンポジウムは小項目横断的なものを目指しているため、応募される大項目における小項目を2種以上含む横断的なご提案をお願いします。

(各大項目における小項目については、後頁の『プログラム分類一覧』をご確認ください)。

◆ワークショップ募集要項

- ・企画提案いただくオーガナイザー（1人あるいは2人）は、日本分子生物学会の会員に限ります。
- ・1テーマあたり90～100分程度の時間枠で、約35テーマを採択します。
- ・海外演者の招聘にあたり、年会からの旅費・滞在費・宿泊費の支給はありません。ただし、海外招聘演者の参加費は免除とさせていただきます。
- ・国内演者についても、旅費・滞在費・宿泊費の支給はありません。ただし、非会員演者の参加費は免除とさせていただきます。
- ・学会の国際化に鑑み、海外演者の有無に関わらず、全てのワークショップは「英語」で講演を行っていただきます。ただし質疑応答における言語は、オーガナイザーの進行にお任せします。
- ・8月末の演題投稿後に予定されるプログラム編成スケジュールが大変タイトなため、提出物等の締切厳守を予めご了承ください。

◆応募要領

下記事項をご明記のうえ、3月25日(金)までにE-mailにて年会事務局(mbsj2011@aeplan.co.jp)までご提出ください。

- 1) 応募されるプログラム（シンポジウムまたはワークショップ）
- 2) 次の6つの開催項目より、応募されるフレームをご指定ください（複数のフレームにまたがる場合は、「7. 複数分野」を選択してください）。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 分子構造・生命情報 2. 分子・複合体の機能 3. 細胞の構造と機能 4. 発生と再生および神経科学 5. 疾患生物学 6. 分子生物学的方法論、技術 <hr/> <p>7. 複数分野（併せて上記のうち該当する全ての分野を記載してください）</p> |
|--|

- 3) テーマタイトル（和文・英文）
- 4) オーガナイザーの氏名・所属（1人あるいは2人）
- 5) 概要（200字程度）
- 6) 予定演者の氏名・所属（応募時での演者による講演承諾は不要です。）
- 7) 連絡窓口となるオーガナイザーの氏名、連絡先
- 8) 予想される聴衆数

◆企画提出およびお問合せ先

第34回日本分子生物学会年会事務局（㈱エー・イー企画 内）
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-2-8 昭文館ビル3階
Tel：03-3230-2744 Fax：03-3230-2479 E-mail：mbsj2011@aeplan.co.jp

【プログラム分類一覧】

大 項 目		小 項 目	
1	分子構造・生命情報	a	遺伝子・核酸・ゲノム構造
		b	オミクス
		c	ポストゲノム解析・バイオインフォマティクス
		d	タンパク質構造
		e	分子進化
		f	糖・脂質
		g	分子構造・生命情報
2	分子・複合体の機能	a	複製 (DNA・RNA・染色体)
		b	組換え・修復・変異
		c	転写
		d	翻訳
		e	エピジェネティック制御
		f	RNA の機能・RNA プロセッシング
		g	生理活性物質
		h	分子・複合体の機能
3	細胞の構造と機能	a	核内構造および機能・ゲノム機能 (染色体・クロマチン・核小体)
		b	細胞質オルガネラの構造・機能・形成
		c	細胞接着・細胞運動・細胞外基質
		d	タンパク質のプロセッシング・輸送・局在化
		e	生体膜・細胞骨格
		f	細胞増殖・分裂・周期
		g	シグナル伝達
		h	細胞死
		i	細胞の構造と機能
4	発生と再生および神経科学	a	初期発生
		b	器官・形態形成
		c	再生・幹細胞・細胞分化
		d	生殖細胞・受精
		e	神経発生
		f	脳・神経系
5	疾患生物学	a	免疫
		b	感染
		c	老化
		d	がん
		e	遺伝性疾患
		f	慢性疾患生物学
6	分子生物学的方法論、技術	a	DNA・RNA 工学
		b	タンパク質工学
		c	細胞工学・発生工学
		d	ケミカルバイオロジー
		e	病因解析および診断
		f	分子生物学的方法論、技術
7	複数分野		

【組織委員一覧】

年会長

花岡 文雄 学習院大学理学部

組織委員長

永田 恭介 筑波大学大学院人間総合科学研究科

プログラム委員長

三浦 正幸 東京大学大学院薬学系研究科

財務・渉外委員長

菅澤 薫 神戸大学自然科学系先端融合研究環境バイオシグナル研究センター

運営・庶務委員長

柳澤 純 筑波大学先端学際領域研究センター

プログラム委員

【分子構造・生命情報】

田畑 哲之	かずさ DNA 研究所	(遺伝子・核酸・ゲノム構造)
夏目 徹	産業技術総合研究所	(オミクス)
上田 泰己	理化学研究所発生・再生科学総合研究センター	(ポストゲノム解析・バイオインフォマティクス)
嶋田 一夫	東京大学大学院薬学系研究科	(タンパク質構造)
橋本 哲男	筑波大学大学院生命環境科学研究科	(分子進化)
新井 洋由	東京大学大学院薬学系研究科	(糖・脂質)
榊原 康文	慶應義塾大学理工学部	(分子構造・生命情報)

【分子・複合体の機能】

荒木 弘之	国立遺伝学研究所	(複製 (DNA・RNA・染色体))
高田 穰	京都大学放射線生物研究センター	(組換え・修復・変異)
五十嵐和彦	東北大学大学院医学系研究科	(転写)
中村 義一	東京大学医科学研究所	(翻訳)
牛島 俊和	国立がんセンター研究所	(エピジェネティック制御)
塩見 春彦	慶應義塾大学医学部	(RNA の機能・RNA プロセッシング)
坂本 和一	筑波大学大学院生命環境科学研究科	(生理活性物質)
加藤 茂明	東京大学分子細胞生物学的研究所	(分子・複合体の機能)

【細胞の構造と機能】

平岡 泰	大阪大学大学院生命機能研究科	(核内構造および機能・ゲノム機能(染色体・クロマチン・核小体))
林 純一	筑波大学大学院生命環境科学研究科	(細胞質オルガネラの構造・機能・形成)
大野 茂男	横浜市立大学医学部	(細胞接着・細胞運動・細胞外基質)
遠藤斗志也	名古屋大学大学院理学研究科	(タンパク質のプロセッシング・輸送・局在化)
杉本亜砂子	東北大学大学院生命科学研究科	(生体膜・細胞骨格)
渡邊 嘉典	東京大学分子細胞生物学的研究所	(細胞増殖・分裂・周期)
一條 秀憲	東京大学大学院薬学系研究科	(シグナル伝達)
須田 貴司	金沢大学がん研究所	(細胞死)
古瀬 幹夫	神戸大学大学院医学研究科	(細胞の構造と機能)

【発生と再生および神経科学】

藤森 俊彦	基礎生物学研究所	(初期発生)
武田 洋幸	東京大学大学院理学系研究科	(器官・形態形成)
岡野 栄之	慶應義塾大学医学部	(再生・幹細胞・細胞分化)

馬場 忠	筑波大学生命環境科学研究科	(生殖細胞・受精)
後藤由季子	東京大学分子細胞生物學研究所	(神經發生)
尾藤 晴彦	東京大学大学院医学系研究科	(腦・神經系)

【疾患生物学】

藤田 尚志	京都大学ウイルス研究所	(免疫)
小安 重夫	慶應義塾大学医学部	(感染)
原 英二	癌研究会癌研究所	(老化)
佐谷 秀行	慶應義塾大学医学部先端医学研究所	(がん)
戸田 達史	神戸大学大学院医学研究科	(遺伝性疾患)
小川 佳宏	東京医科歯科大学難治疾患研究所	(慢性疾患生物学)

【分子生物学的方法論、技術】

稲田 利文	東北大学大学院薬学研究科	(DNA・RNA工学)
山岸 明彦	東京薬科大学生命科学部	(タンパク質工学)
大森 齊	岡山大学工学部	(細胞工学・発生工学)
浦野 泰照	東京大学大学院医学系研究科	(ケミカルバイオロジー)
剣持 直哉	宮崎大学フロンティア科学実験総合センター	(病因解析および診断)
漆原 秀子	筑波大学大学院生命環境科学研究科	(分子生物学的方法論、技術)

第 33 回日本分子生物学会年会 年会報告

第 33 回日本分子生物学会年会は、第 83 回日本生化学会大会との合同大会（BMB2010：Biochemistry and Molecular Biology 2010）として、昨年 12 月 7 日（火）～ 10 日（金）の 4 日間、神戸ポートアイランドにて開催いたしました。

当日は、天候にも恵まれ参加者総数 11,000 名を超える方々にご参加いただき、演題数 6,061 題（うち一般演題 5,368 題）の発表が行われ、各会場が非常に活気に溢れ、盛会のうちに終了することができました。

2 年ぶりに合同大会を開催するにあたり、第 83 回日本生化学会大会の田中啓二会頭をはじめ、組織委員幹事会にて両学会の分野を超えて議論できるようなプログラムを検討いたしました。

特別講演をプレナリーレクチャーとパイオニアズレクチャーの 2 本立てとし、それぞれの研究分野の開拓・発展に先駆的な貢献を果たすとともに、なお世界最先端の研究を展開されている方々に、今後の方向性、若手研究者へのメッセージなども含めたご講演をお願いしましたが、いずれもたいへん盛況でした。

昨今の経済状況の中、前回の合同大会より会場数を減らさなければならず、シンポジウムや口頭発表の数が少なくなりましたが、その分厳選された内容となり、両学会員の間で密度の濃い議論が行われたと思っております。

ポスターセッションでは、例年のポスターパネルのサイズより幅を狭めたことで、一部では狭すぎるというお言葉も頂いておりますが、距離感が縮まり活気溢れるポスターセッションになったと思っております。

今後の両学会の在り方を会員の皆様全員で考える時期に来ていたと思われましたので、会期中にアンケートを配布致しましたところ 2,000 名を超える方々よりご意見を頂くことができました。非常に貴重なご意見が多く、次回以降の年会運営方策を考えるためにも大切な資料となることと存じます。ご協力いただきました方々には感謝申し上げます。アンケート結果につきましては、大会ホームページに公開しておりますので、ご欄ください。

また、合同大会会場から移動して東京大学安田講堂で開催致しました市民公開講座もパネリストの先生方と司会の膳場貴子さんの魅力溢れるお話のおかげで、300 名を超える参加者の方にお集まり頂き、活発な討論もあり、成功裡に終了することができました。

本大会が、今後の生命科学の発展ならびに若手研究者の育成、更には一般の方々への啓発に寄与できたのであれば、主催者一同幸甚でございます。最後になりましたが、合同大会の企画・運営にご協力いただきました組織委員、座長、講演者の先生方、大会にご参加いただきました皆様ならびに多大なる援助を頂きました展示・ランチョンセミナー出展企業様、助成諸団体に厚くお礼申し上げます。

また、両学会の間を取り持ち素晴らしい大会にして頂いた両学会事務局ならびに BMB 事務局、学会当日の数多くのスタッフの方々にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

2011 年 2 月

第 33 回日本分子生物学会年会（BMB2010）

年会長 谷口 維紹

研究倫理委員会・若手教育問題ワーキンググループ報告

本ワーキンググループは、日本分子生物学会研究倫理委員会の下部組織であり、今年で4年目を迎える。これまで年会でのシンポジウムや、科学雑誌における座談会や連載等を行い、研究倫理や、誤りのない研究や発表を行うための技法について議論してきた。本年度もBMB2010（第33回日本分子生物学会年会・第83回日本生化学会大会 合同年会）において若手教育シンポジウム「若手教育ランチョンセミナー 2010 ―あなたの解釈は大丈夫？ 統計解析と研究ルール―」を開催した（平成22年12月8日 主催：特定非営利活動法人 日本分子生物学会、協賛：チエル(株)、(株)学研メディカル秀潤社）。神戸国際会議場3階国際会議室（400人収容可能）を用意したが、約470名（昨年とほぼ同数）の参加者があった。

過去の第1回、第2回シンポジウムでは研究不正の背景に関わる問題について、第3回は正しく研究成果を提示するための技術的な問題（Photoshopの適切な使用方法など）について取り上げ、いずれも好評であった。なお、昨年の講演内容に関連した記事はワーキンググループメンバーが中心となって「蛋白質 核酸 酵素」誌に6回の連載として執筆した。これらは、共立出版のご厚意によって全文日本分子生物学会のホームページに転載させていただいている。また今回のシンポジウムでも資料として配付した。第4回にあたる今回も昨年を継承して技術論を中心とすることにし、これまでの参加者からの要望の多かった統計解析を第一部のテーマとした。講演は、京大病院探索医療センター検証部の手良向聡准教授にお願いした。続く第二部は、恒例となったワーキンググループメンバーによるパネルディスカッションとし、テーマはオーサーシップとノート管理を取り上げた。また、昨年同様、フロアからの意見をリアルタイムにスクリーンに表示できる「レスポンスシステム」を導入した。今回は200台のレシーバーを配布したので、フロアの参加者の約半数の意見をその場で集めることができた。なお、昨年は入場に若干混乱があったため、今回はお弁当の引換券を企業ランチョンと同様に整理券制度とした。

I. シンポジウムの概要

司会：上村 匡（京都大学）、白髭克彦（東京大学）
（※全文は分子生物学会のWEBサイトに掲載してありますので、そちらも是非ご覧下さい）

【第一部：講演】

「科学的実験と統計的実験の境界」

手良向 聡（京大病院探索医療センター検証部）

基調講演は統計解析の専門家である手良向聡准教授にお願いした。講演では、Nature Cell Biologyの投稿規定にある統計ガイドラインに沿うかたちで、それぞれの項目をご説明いただいた。通常はそのようなガイドラインがあっても機械的に当てはめているだけで、その背景などについて考えることがない。しかし、そのような統計解析の原理や数学的背景を理解することが、より正しい処理につながると考えられる。今回ご説明いただいた内容としては、

- ・適切な統計の検定方法について。例えばKaplan-Meier法を使うべきとき（マウスが生存していて「打ち切り」となる場合など）
- ・標準誤差と標準偏差の違い
- ・P値、信頼区間、エラーバーについて（ n が3未満のときはエラーバーを提示すべきではない、 n が5未満のときはデータをプロットすべきであるなど）

などがあった。また最後には会員から事前に集めた質問の中からひとつの具体例を取り上げて解説いただいた。これは $n=10$ の実験を3回繰り返した場合にどのような検定が妥当かというもので、興味深い内容であった。

【第2部：パネルディスカッション】

「研究ルールについて考える」

パネリスト：日本分子生物学会・若手教育問題ワーキンググループ

上田泰己（理化学研究所）、上村 匡（京都大学）、後藤由季子（東京大学）、小林武彦（遺伝研）、塩見美喜子（慶應大学）、白髭克彦（東京大学）、水島 昇（東京医科歯科大学）

参加者約470名に対して200台のレスポンスシステムを配布し、以下の設問について匿名式で答えていただいた。解答時間は30秒で、終了すると前方スクリーンに結果がただちに表示される形式でディスカッションを進めた。（以下のデータは小数点以下四捨五入）

問1. あなたの年齢は？

1. 20代	54%
2. 30代	29%
3. 40代	13%
4. 50代以上	2%
5. わからない	2%

問2. あなたの立場は？

1. PI (ラボの主宰者) 8%
2. PI 以外 87%
3. わからない..... 5%

問3. あなたは自分のこれまでの統計解析に自信がありますか？

1. 自信がある..... 8%
2. 不安がある..... 72%
3. 間違いがあった..... 14%
4. わからない..... 6%

問4. オーサーシップについて不公正感を持った経験がありますか？

1. ある..... 38%
2. ない..... 36%
3. わからない..... 26%

問5. 論文の筆頭著者を決めるのはどの時点が適切ですか？

1. プロジェクトの開始時..... 23%
2. プロジェクトの中間あたりの時期..... 20%
3. 論文執筆の段階..... 55%
4. わからない..... 2%

問6. 「Equally contributed」についてどう思いますか？

1. 必要。実際に Equally な評価をうける。 14%
2. 必要。でも 1st がやはり有利。 65%
3. 不要。 7%
4. わからない。 14%

問7. あなたの研究室では、研究に直接携わっていないスタッフが自動的に著者にはいることはありますか？

1. ある..... 53%
2. ない..... 38%
3. わからない..... 8%

問8. ラボミーティングでのAさんの発言したことによって、研究の本質が明らかにされ、論文になった。Aさんはそれ以外に貢献していない。

1. Aさんは共著者として適当..... 34%
2. Aさんは謝辞で十分..... 59%
3. わからない..... 7%

問9. Aさんは超解像度顕微鏡の使い方を初心者B君に懇切丁寧に教えたが、実際のサンプルはB君がひとりで解析して論文にした。Aさんは他には貢

献していない。

1. Aさんは共著者として適当..... 15%
2. Aさんは謝辞で十分..... 82%
3. わからない..... 3%

問10. あなたの研究室では、メンバーがラボを去る際、実験ノートオリジナルを持ち去っていますか？

1. 持ち去っている..... 15%
2. PI との話し合いで持ち去ることもある 16%
3. オリジナルはラボで保管する..... 64%
4. わからない..... 5%

問11. あなたのPIは、あなたの許可なくあなたの実験ノートを見ることは許されるのでしょうか？

1. 許される..... 66%
2. 許されない..... 23%
3. わからない..... 11%

問12. あなたの同僚は、あなたの許可なくあなたの実験ノートを見ることは許されるのでしょうか？

1. 許される..... 39%
2. 許されない..... 53%
3. わからない..... 8%

これらの設問をもとになされたディスカッションの概略は以下の通りである。

- ・オーサーは最終的な貢献度で決められるべきではあるが、研究者のモチベーションなどを考慮すると実際は途中で議論しながら大枠を決める場合が多い。イコールコントリビューションというケースもあるが、その受け取られ方はまだまちまちである。初めから設定されるというより、研究の流れで発生するべきものであろう。しかし、ウェットとドライの研究者のような異なる分野の研究者が参画するような場合は、イコールコントリビューションは重要なしくみでもある。
- ・ギフトオーサーシップは日本では多いとされているが、本会参加者の調査でもかなり多そうであるという結果となった。しかしオーサーの真の貢献をフェアに評価するためにも、本当に研究に携わった人がオーサーとなるべきであろう。オーサーとしての基準のようなものをPIになる前に仕入れておけるとよいと考えられる。
- ・オーサーの基準としては、アイデアとしての貢献より、実際に手を動かしてフィギュアに貢献したかを重要視するという考えと、アイデアを出すというところを重要視する場合とあり、分野によって多様な意見がある。研究の開始のきっかけになるようなアイデアについては十分評価されても良いという意見もあつ

た。一方、技術指導的な貢献のみの場合については否定的な考えが多かったが、共同利用施設のような場合については個別の事情があり得る。

- ・上村委員より WEB で公開されている他機関におけるオーサーシップの基準について解説があり、会場の参加者と情報を共有した。
- ・実験ノートについては機関・研究室に帰属するために、原則としてラボを去るときはノートは研究室においていくべきである。しかし、実情としては持って行きたいとフロアからの声もあった。また、共有の財産であれば誰もが見て良いかという問題については、PI であれば許可されてもよいと考えられるが、同僚同士が自由に見て良いかどうかと言う点についてはまだコンセンサスが得られていないであろう。一方、フロアからは見られて困るものはあるのか？という質問があり、研究室の情報の共有化についても議論した。

以上が主な内容であるが、全文は学会ホームページをご覧いただきたい。今回は若手を中心であったため、実際に論文執筆の経験の無い参加者も多かったと思われる。しかしそれでも、オーサーシップについて不公正感を持った経験者が38%いるということは、この問題がより議論されるべきものであること示していると言えよう。

オーサーシップに関する極端な例については一般化できるかもしれないが、実際は個々に微妙な問題を含んでいるケースが多い。今回は第1回目ということもあり、問題点の提起と共有ということをもまずは目指した。パネリストのみなさんは必ずしもこのような問題の専門家ということではなく、PI・研究者の立場から率直なご意見を頂いた。これをもとにさらにそれぞれの研究室で議論を進めていただければ幸いである。

II. シンポジウムのアンケート結果

(アンケート回収数：356名)

(回答は四捨五入で計算)

問1 あなたの年齢は？

① 24 歳以下	101	28.4%
② 25 ～ 29 歳	92	25.8%
③ 30 ～ 34 歳	71	19.9%
④ 35 ～ 39 歳	36	10.1%
⑤ 40 ～ 49 歳	40	11.2%
⑥ 50 ～ 59 歳	9	2.5%
⑦ 60 歳以上	1	0.3%
※ 未記入	6	1.7%
計	356	100.0%

問2 あなたの現在の身分・職階は？

① 学部学生	38	10.7%
② 大学院生 (修士)	76	21.3%
③ 大学院生 (博士)	71	19.9%
④ ポスドク	35	9.8%
⑤ 大学教員 (助教・講師・准教授)	65	18.3%
⑥ 大学教員 (教授)	14	3.9%
⑦ 研究員	26	7.3%
⑧ 主任研究員・チームリーダー・室長以上	5	1.4%
⑨ 企業	19	5.3%
⑩ その他 (行政)	1	0.3%
⑩ その他 (記述なし)	3	0.8%
※ 未記入	3	0.8%
計	356	100.0%

問3 あなたは PI (Principle Investigator: ラボの主宰者) ですか？

① はい	24	6.7%
② いいえ	320	89.9%
③ 場合による	7	2.0%
④ わからない	3	0.8%
※ 未記入	2	0.6%
計	356	100.0%

問4 このシンポジウムを何で知りましたか？ (複数回答)

① 学会ホームページ	139	37.7%
② ポスター	33	8.9%
③ 学会会報	113	30.6%
④ 会場内の広告	14	3.8%
⑤ 「細胞工学」広告	1	0.3%
⑥ 他人に聞いた	32	8.7%
⑦ リピーター	16	4.3%
⑧ その他 (プログラム)	14	3.8%
⑧ その他 (配付資料)	1	0.3%
⑧ その他 (記述なし)	1	0.3%
※ 未記入	5	1.4%
計	369	100.0%

問5 このシンポジウムに対する全体的なご感想をお教え下さい。

① とても面白かった	134	37.6%
② まあまあ面白かった	164	46.1%
③ 普通	35	9.8%
④ あまり面白くなかった	9	2.5%
⑤ つまらなかった	3	0.8%
※ 未記入	11	3.1%
計	356	100.0%

問6 このシンポジウムの内容に関する自由なご感想をお聞かせください。(一部のみ抜粋)

- ・研究倫理について再考する良い機会になっています
- ・改めて問題を認識した
- ・このような身近な話は今後大いに活用する余地があるので、素晴らしい企画だと思う、非常に面白かった
- ・インタラクティブなセミナーで有意義だった
- ・新たに実験する若手にとって、こういうものはとても有効だと思う
- ・up to date なトピックや若い研究者の課題をよく取り上げていて良い
- ・自分に関わる問題なので大変ためになった
- ・とても面白いので来年もまた参加したい
- ・興味深かったが、予想していた内容と違った
- ・会場がもっと盛り上がりた良かった
- ・あらかじめ現場の質問を集めておいて、それらに対する Q&A を数題やっていただくと良いかと思った
- ・若手 PI 向けなのか、若手教育とはどのあたりを対象としているのかわかりにくい
- ・若手だけでなく年上の人も一緒に
- ・第二部でも、第一部の講演と関連した議論があれば良かった
- ・問題提起の場として有効だと思うが、ワーキンググループとして答えの指針を示すことはしないのか
- ・やや食い足りない印象を持った
- ・どのレベルの方を対象にするかが問題だと思うが、同じ時間帯に開催されるランチョンセミナーは先生方対象なので、若手と題名についているから学生の方が多かったと思う
- ・資料があって有り難かった

【第一部：講演について】

- ・短い時間だったが、完結にまとまっていてわかりやすかった
- ・教科書だけを頼りに統計の方法を選んでいたので、このような体系的な総論は参考になった
- ・統計については自分の勉強の必要性を痛感した
- ・非常に興味のある内容だったので、もう少し詳しく聞きたかった (同コメント計5件)
- ・統計をかじっただけの私には少しわかり難いところがあったので、もう少しかみくだいて欲しかった
- ・教育的な内容なので、質疑応答の時間をもっととったほうが良いと思った
- ・独立したシンポジウムやセミナーをやって欲しい

【第二部：パネルディスカッションについて】

- ・他の方々のラボの考え方などがわかってとても良かった

- ・他の研究室の実体が垣間見えて良かった、研究室の中にいるとそれが当たり前になっていくので怖いと思った
- ・具体的なケースについて先生方の意見が聞けたので面白かった
- ・日頃から実験とばかり向き合っていると、このようなことを考えることがなかったので良い機会だった
- ・ラボによって考え方が様々だったので面白かった
- ・意外な回答が多く見られて興味深かった
- ・デリケートなところまで突っ込んだ内容でとても勉強になった
- ・普段考えることのない大切なことを意識する機会となった
- ・ラボ運営でオーサーシップに関する Q&A が非常に面白かった
- ・実際に感じてはいるが口に出さないオーサーシップ等の問題が週上に出され有意義だった
- ・自分の研究室と他の研究室、個々人の意見の違いがみえて面白かったが、もう少し時間にゆとりがあれば良かった
- ・ラボのメンバーのときと主宰者になったいまでは考え方が変わっている自分に気付いた
- ・視点が鋭く、身近な問題として考えることができた
- ・よく変人と言われるが、第二部のアンケートを見るかぎり常識人なのかと思った
- ・若手にも重要な内容であるが、オーサーの件などラボのやり方を変える (好ましい方向にもっていくため) には、いわゆるボスが変わらないといけないので、もっと年輩の人に聞かすべき
- ・実験ノートなどについて、スタンダードを示して欲しかった
- ・考え方を共有できるのは、最終的にどれを選ぶにしろ意味のあることだと思う
- ・もっと突っ込んだ議論の場であって欲しかった
- ・もっとパネリスト同士のディスカッションを聞きたかった
- ・もっとディスカッションにかかる時間が欲しかった (同コメント計2件)
- ・クリッカーを使うことで本音が聞けてとても面白かった
- ・状況を知るうえで意見を聞くのは良いことだが、こうすべきという答えが曖昧
- ・オーサーシップの問題は若手向きも良いが、PI などが集まり、もっと上の方が一緒に考える時間があっても良い、問題視していない上司に聞かせたい
- ・オーサーシップは本当に難しい、再考のきっかけをありがとうございました
- ・研究者はラボ運営を考えて成長していくことが大事

- ・ Ustream での中継や Twitter での回答・質問募集を検討して欲しい
- ・ アンケートしっ放しの感じがあったので、指導的意見が欲しい

【聴衆参加型レスポンスシステム】

- ・ 聴衆参加型なのが良かった（同コメント計 3 件）
- ・ 参加型にしたのはフィードバックがあり良かった
- ・ 際どい話題なので、匿名でコメントできるようなシステムにして欲しい、数値だけでは価値が半減
- ・ 身分ごとの回答が見られるようにして欲しい
- ・ 棒グラフの回答数を大きく表示して欲しい
- ・ クリッカーが全員分欲しかった
- ・ パネリストだけのレスポンスシステムもあれば良かった
- ・ Q&A にかける時間が長い（同コメント計 4 件）
- ・ ウェブ上で回答する形にすれば 200 人に絞らなくても母集団は大きいほうが良い
- ・ クリッカーが配布されず残念だった（同コメント計 3 件）
- ・ 面白かったが、クリッカーなしではつまらない

問 7 昨年から開催時間を夜間からランチョンへ変更しました。どうでしょうか？（複数回答）

① ランチョン形式がよい	314	88.0%
② 夜間（18 時以降がよい）	22	6.2%
③ その他の時間（どちらでも）	3	0.8%
③ その他の時間（シンポジウムやワークショップの枠）	3	0.8%
③ その他の時間（ランチョンの時間帯以外）	1	0.3%
③ その他の時間（午前中）	1	0.3%
③ その他の時間（13 時～14 時半）	1	0.3%
※ 未記入	12	3.4%
計	357	100.0%

問 8 昨年と今年は精神論的ではなく、より具体的な方法論をテーマにしましたが、いかがでしょうか？（複数回答）

① 具体的な方法論が良い	233	65.3%
② もっと本質的な議論の方が良い	43	12.0%
③ 時間が短くなくても両方とも必要	56	15.7%
※ 未記入	25	7.0%
計	357	100.0%

問 9 『聴衆参加型レスポンスシステム』はいかがだったでしょうか？

① 有効だった	286	80.3%
---------	-----	-------

② あまり意味はない	24	6.7%
③ その他	20	5.6%
※ 未記入	26	7.3%
計	356	100.0%

問10 今まで4年間にわたり、このような活動を続けてきましたが、効果はどうでしょうか？

① 多いに効果がある	117	32.9%
② 多少効果はある	174	48.9%
③ あまり効果は感じられない	17	4.8%
④ 全く効果はない	1	0.3%
※ わからない	12	3.4%
※ 未記入	35	9.8%
計	356	100.0%

問11 今後このような試み続けるべきだと思いますか？

① 是非続けるべき	304	85.4%
② 続けるべきだが方法を変えた方がよい	33	9.3%
③ 止めた方がよい	1	0.3%
④ わからない	9	2.5%
※ 未記入	9	2.5%
計	356	100.0%

問12 今後取り上げて欲しいテーマがありましたら教えてください。（一部のみ抜粋）

- ・ 具体的なデータを取り上げ、統計解析を再度やって欲しい（同コメント計 3 件）
- ・ 今回の統計など、実験をするうえでの基本的知識をテーマにして欲しい
- ・ オーサーシップについてもっと議論して欲しい
- ・ 論文を書くうえでの心構え
- ・ ノートの書き方
- ・ ラボノートの管理方法
- ・ 電子データ管理
- ・ データベースの取り扱い
- ・ 実験手法を例に挙げての解説（同コメント計 2 件）
- ・ 修士として、博士として、卒業できる基準について
- ・ 大学院時代、研究以外にどんなスキルを身につけるべきか
- ・ 研究等での残業時間
- ・ 研究室内の人間関係の構築について（同コメント計 4 件）
- ・ PI の研究指導（研究室運営）に疑問を抱いた場合の対処法
- ・ 心を病んでしまってラボに来られなくなった人の対応
- ・ 研究室の倫理問題、テーマの設定、実験の進め方に関すること

- ・指導放置
- ・PIの要求（命令）にどこまで従うべきか
- ・PIの表に出ないワンマン性（実験方針等）について
- ・PIになるまでに身に付けるべき具体的なスキル
- ・若手とPIとの意見交流（同コメント計4件）
- ・研究室の運営、良い例と悪い例（成功・失敗）
- ・どこまでが教育で、どこからがアカハラ・パワハラか（同コメント計3件）
- ・若手が成長するために、例えば失敗したときのリカバリー（長期・短期）
- ・若手研究者（ポスドク）のキャリアパス（同コメント計7件）
- ・研究と生活の両立と将来の構築
- ・博士号取得後や中退者の進路など（参加型セミナー）
- ・少ない受け皿にあふれる博士、過剰なバイオ系DC定員
- ・科研費（助成金）の取り方と使い方
- ・研究における地方と中央の格差の問題
- ・海外留学とその後の日本への復職
- ・留学について
- ・過去に参加できなかったのも、精神論的なテーマを取り上げて欲しい

問13 その他、ご意見ご感想などなんでもどうぞ。（一部のみ抜粋）

【開催形式について】

- ・時間が短かった（同コメント計5件）
- ・会場を広くして欲しい（同コメント計4件）
- ・若手（学生・ポスドク）向けとそれ以外向けに2回開催して欲しい、それぞれで必要な内容も違うと思うので
- ・もっと多くの人が聞けるように開催しても良い企画だと思った
- ・夜間なら来なかったのも、これからは是非ランチョンにしてもらいたい

【開催テーマについて】

- ・年によって変えても良い
- ・時間的にテーマは1つにしたほうが良い
- ・同じテーマでも何度でも行えば色々良いことが見えてきそう
- ・問題提起だけでなく、どのように改善していくか、先生方に動いてもらいたい
- ・他に聞く機会のないプログラムなので、どちら（精神論・方法論）も必要だと思う

【そのほか】

- ・これからも面白い企画を楽しみにしています
- ・考えさせられて、とても有意義だった
- ・取り上げられていた問題が皆も問題視していることだとわかって良かった
- ・忙しい先生方が真剣に議論している姿に感銘を受けた

Ⅲ. アンケートの分析と今後の検討

今回は参加者の54%が30歳以下、84%が40歳以下という若い年齢分布で、約9割が非PIであった。これは前回とほぼ同様の傾向であり、前回からランチョンセミナー形式とした点が大きいと考えられる。会場は今回400人のスペースを用意したが、それでも立ち見となった。会場に入ることができなかった方にはこの場をお借りしてお詫び申し上げたい。ランチョンセミナーの場合は昼食が必要となり、この方式では人数は限界に近い。以前のように夕方からポスター後に行くという選択もあるが、アンケートの結果からは88%と圧倒的にランチョンスタイルの希望が多かった。

シンポジウムに関する感想は、「とても面白かった」、「まあまあ面白かった」を合わせると83.7%であった。これは昨年の93%より下回ったものの、第1回、第2回とはほぼ同様である。また今後も是非続けるべきとの意見が85%を占め、大きな支持をいただいた。今回から学会予算からのサポートも頂いており、今後も学会の重要な活動として積極的に取り組んでいきたい。

今回は例年通り第一部で基調講演、第二部でパネルディスカッションとしたが、どちらも好評であった。ただ、どちらも時間不足という感想も多く、これについてはやはりランチョンスタイルの限界でもある。午前のシンポジウム終了からの会場移動を考えると、今回もかなり慌ただしさはあり、時間に関する課題はまだ残っている。

今回はクリッカーを用いた聴衆参加型とした。昨年より100台増量し、参加者の約半数の200名にクリッカーを使用いただけた。実際に貴重な意見を集めることができ、参加者からも好評であった。まだ数が不足というアンケート意見もあったが、やはり限られた時間での配布と回収を考えてもこれが限界に近いと思われる。今後アンケート形式を続ける場合にはインターネットを用いるなどの方法も検討する必要があるかもしれない。

今後のテーマについては、具体的な方法論を希望する意見が多く、ノートの書き方（今回部分的に取り上げた）、ラボの運営、留学を含めたキャリアパス、などが多かった。今後の参考にさせていただきたい。

本ワーキンググループは当初は科学不正に対する

若手教育ということでスタートし、不正の温床となるような問題点について中心的に議論を行った。それと同時に、精神論的なことに終始することなく具体論も同時に取り上げてきた。特に昨年の技術論の講演とPNEのシリーズは好評であり、今回の統計に関する講演も有用な情報を提供できたのではないと思う。研究不正をしないことは、研究についてのプロであることが前提であり、常識を「知らなかったから間違えた」では済まされないであろう。一方で、第二部で触れたような問題は、個々の研究室だけでは解決しにくい問題もあると思われる。学会のような機会オープンに議論できることが、結果的に研究倫理・研究不正というものに取り組むことにつながると考えられる。

IV. おわりに

今回で4年目を終了し、上田泰己、私（水島昇）が任期満了で退任することとなりました。中山敬一前座長によって強力に推進されたこのWGをお引受するのは大変な責任とプレッシャーでしたが、みなさまからの温かいご支援によって次ぎにバトンタッチすることができました。ここに、深くお礼申し上げます。2011年からは塩見美喜子氏、小林武彦氏、斎藤通紀氏にあらたにWGメンバーに加わっていただき、白髭新座長の下で本WGがさらに展開されることと思います。日本分子生物学会のユニークな取り組みとして、今後も会員皆様からのご支援とご協力をお願い申し上げます。

（若手教育問題ワーキンググループ座長 水島昇）

BMB2010・男女共同参画企画ランチョンワークショップ開催報告

ワークショップタイトル：「男性の視点から見た男女共同参画」

日 時：2010 年 12 月 7 日(火) 11:45 ~ 13:00

会 場：第 10 会場（神戸ポートピアホテル本館地下 1 階・偕楽 3）

企 画：BMB2010 男女共同参画 WG 日本分子生物学会男女共同参画委員会：篠原 彰、杉本亜砂子
日本生化学会男女共同参画推進委員会：有賀 寛芳、小川 温子

BMB2010において男女共同参画企画ランチョンワークショップ「男性の視点から見た男女共同参画」を開催した。ワークショップおよびアンケート結果概要について以下に報告する。なお、ワークショップ全文、ワークショップで用いた資料およびアンケート結果は分子生物学会 Web サイトに掲載した。（http://wwwsoc.nii.ac.jp/mbsj/gender_eq/ws2010.html）いずれも極めて興味深い内容なので是非ご覧いただきたい。

I. ワークショップ概要

【第一部】イントロダクション「日本分子生物学会・日本生化学会における男女共同参画の現状」

杉本亜砂子（日本分子生物学会・男女共同参画委員長／東北大学）

第一部では、日本分子生物学会・日本生化学会における男女共同参画の現状についての数値データを紹介した。ここでは日本分子生物学会の数値を紹介する。女性会員は 24.4%（学生会員 33.8%、一般会員 19.9%）であり、科学技術分野全体の平均よりは高いものの、役員（第 16 期理事・監事・幹事）の女性比率は 5.3% と低い点が課題である。役員の女性比率に関しては、第 17 期理事会では 30 名中 4 名が女性となり、女性比率に改善が見られている。

次に、前回の年会から開始した年会演題発表者の属性調査結果についても報告した（27 ページ参照）。ポスター発表者の女性比率は 28.8% で学会員の女性比率と同等であったが、昨年の調査と同様、ワークショップ・シンポジウムスピーカー（8.5%）やワークショップ・シンポジウムオーガナイザー（5.6%）の女性比率は、30 代～50 代の幅広い年代にわたってポスター発表者の女性比率よりも顕著に低いことが明らかとなった。また、今回は一般演題登録者のうちの口頭発表希望者および採択者の比率も算出した。その結果、採択率（採択者／希望者）は男女でほとんど差がない（男性 43.1%、女性 42.1%）が、口頭発表希望者比率は男性よりも女性が若干低い（男性 34.2%、女性 28.7%）ことが明らかになった。

最後に、分子生物学会の属性調査が契機となり他学会にも年会発表者の属性調査が広まりつつあることを紹介した（資料は学会 HP に掲載）。各学会の調査結果から、遺伝学会や植物学会などではシンポジウム発表者・オーガナイザーの女性比率と会員女性比率がほぼ一致しており、女性の visibility 向上がすでに達成できている学会もあることが示された。このような事例は心強いとともに、分子生物学会内の変革の必要性を再認識させるものであった。

年会における女性の visibility を向上させるためには、女性会員自身が演題発表・口頭発表に積極的に参加することを心がけるとともに、メンターが女性研究者の学会参加を継続的にエンカレッジおよびサポートすることも必要だと思われる。シンポジウムオーガナイザーや年会企画委員会等の女性比率も意識的に引き上げていく必要があるかもしれない。今後も演題発表者の属性調査を継続することで推移を見守りつつ、対策についても引き続き検討していく予定である。

【第二部】講演：安藤哲也氏（NPO 法人 ファザーリング・ジャパン）

Fathering Japan(NPO 法人 ファザーリング・ジャパン)の安藤 哲也 氏の講演を聞き、その後フリートーク、質疑応答を、安藤氏を交えて行なった。ワークショップでは約 180 名の参加者があり、その後も 50 名程度が会場に残って議論に参加した。今回は、これまでのワークショップとは 2 つの点で大きく異なっていた。学会特有の視点で男女共同参画を見るのではなく、より一般社会からの視点でみることで、また、男性の視点を取り入れることである。そのために、今回は安藤氏のための講演を聴くというスタイルになった。講演では、安藤氏の活動から始まり、男性が家事、育児に積極的に参加することが男のステータス、スキルアップの 1 つという考えを中心に話をして頂いた（講演の全文記録、PPT 資料は学会 HP に掲載）。

男性研究者の意識改革を意図した企画であったが、アンケート結果にもあるように、比較的男性の参加が多かったのが特徴である（以下のアンケート結果参照）。また、男性から比較的、好評価も得られている。一方、講演者の一方的な話であったこと（本人が希望したためだが）、研究者を取り巻く問題を全く扱っていないことに対する批判もあり、今

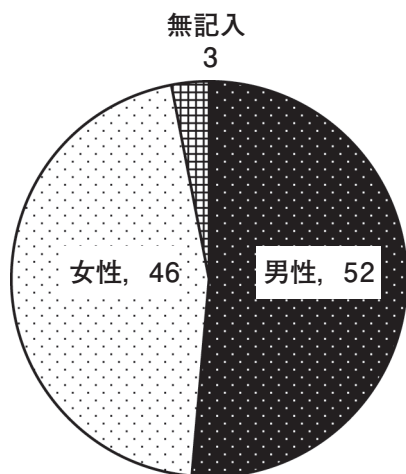
後への課題を残した。今後はこのような企画が年会ワークショップに向いているかどうかも含め、議論するべきであろう。

Ⅱ. ワークショップ後のアンケート集計結果

(アンケート回収枚数 101 枚)

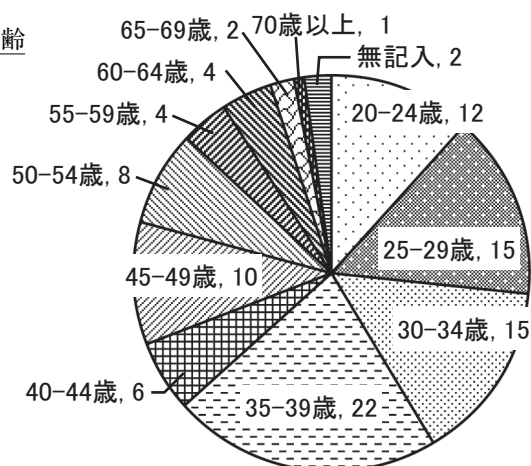
< 1 > 回答者の属性 (数字は人数を表す)

・性別

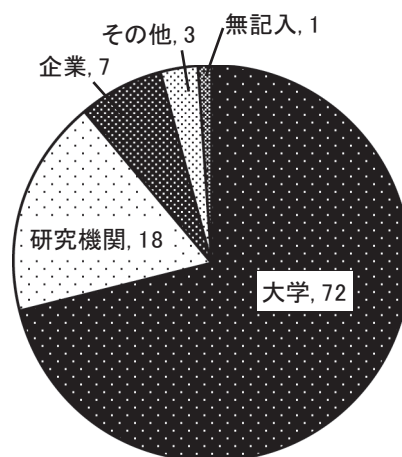


テーマが男性の育児参加だったということもあり、例年のアンケート回答者の男性比率（昨年は 27.5%）と比べ、男性が増加し過半数となった。本企画テーマへの男性会員の興味の高さが示されている。

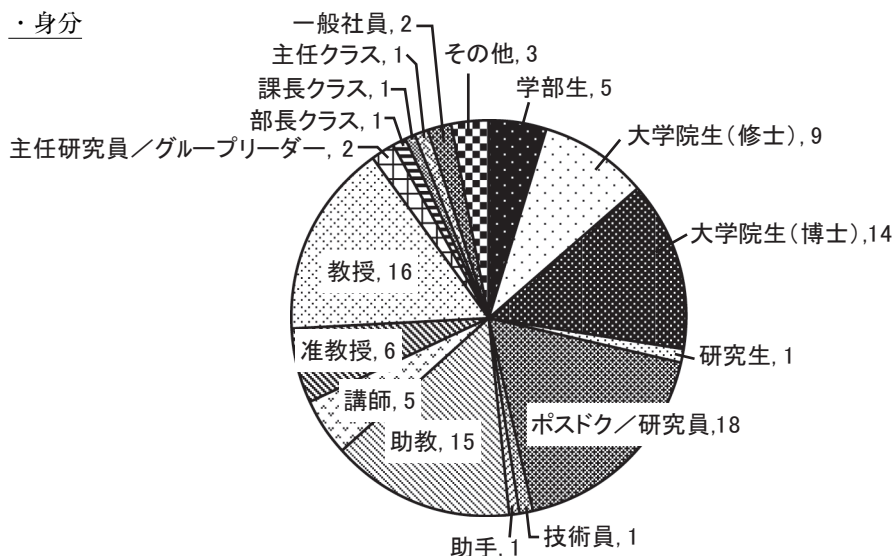
・年齢



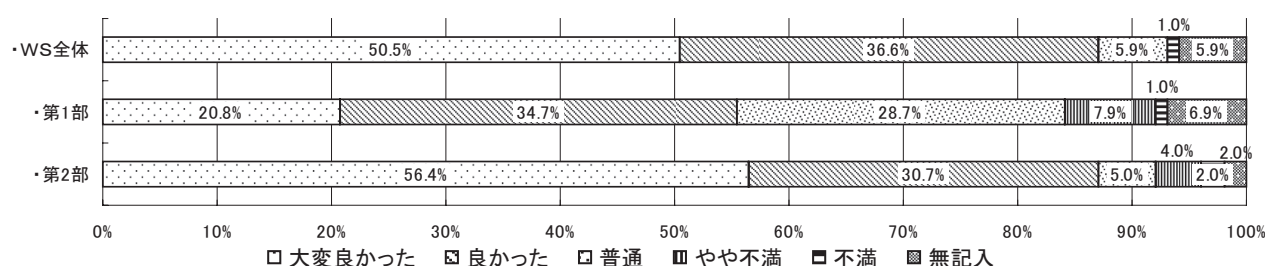
・所属先



・身分



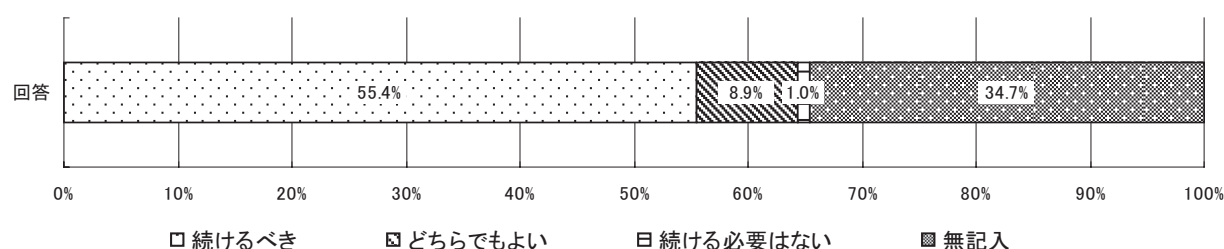
<2> 今回のワークショップの感想をお教え下さい。



(自由記述の概要)

第1部の属性調査結果を他学会と比較した内容について、分子生物学会の現状が「遅れている」ことが分かったとの意見が複数見られた。2部の男性の視点、意識をテーマとして取り上げた点の斬新性を評価する意見が多く見られた。また、ファザーリングや家庭における父親の重要性を、同意、納得しつつ、一方で、アカデミックな研究生活のなかで、ファザーリングを実現することの難しさを指摘する意見もあった。今後のワークショップへの改善点として、タイトルや内容を含め、男性も気軽に参加できるような企画にすることが必要という意見があった。

<3> 今後も年会において男女共同参画ワークショップを行うべきだと思いますか？



(自由記述の概要)

アンケート協力者の過半数から、今後もワークショップを続けるべき、との回答が得られた。今後取り上げてほしいテーマとして、「学会としての男女共同参画への取組み」、「国などの男女共同参画に関する施策」など研究者を支援するプロジェクトの紹介を希望する意見があったほか、自身の「ワークライフバランス」、「キャリアアップ」を目指して、他の研究者の具体的な体験談や、実際に工夫していることを聞いて、参考にしたいと考える声も多くあった。

<4> 今後、男女共同参画委員会で行って欲しい事業やイベント等があればお教え下さい。

(自由記述の概要)

育児・介護と仕事の両立をはじめ、若手による企画の立案など、年会企画のテーマに関する意見が多く寄せられた。また、研究者同士の意見交換の場の設定や、海外ネットワークの作り方について、学会の協力を希望する意見も見られた。

<5> その他、ご意見がありましたらご自由にお書き下さい。

(自由記述の概要)

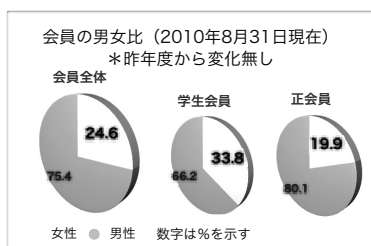
今回のワークショップについて、良かった、勉強になった、男女問わずもっと多く年会参加者に聞いてもらいたかったという、意見が目立った。また、属性調査結果の効果的な活用や、個人的意見を所属先や国の施策に反映させる方法についての意見など、自ら現在の状況を改善していきたいという、前向きな姿勢を感じさせる記述が多く見られた。

日本分子生物学会年会における発表者の属性統計

～年会における女性のactivity向上を目指して～

”学会のシンポジウムでの発表者やオーガナイザーの女性の比率は
学会員全体における比率と比べて低いのではないだろうか？”

日本分子生物学会男女共同参画委員会はこのような疑問をもち、2009年度から年会発表者の演題カテゴリーごとの属性調査を行っています。今年度は日本生化学会との合同大会（BMB2010）における結果をまとめ、比較しました。



昨年までの結果と大きな違いはなく、学生会員全体と一般演題発表者の男女比は同等である一方、シンポジウム/WSのオーガナイザーやスピーカーは女性の割合が低く、正会員の女性率（19.9%）と比較してもその半分に満たなかった。

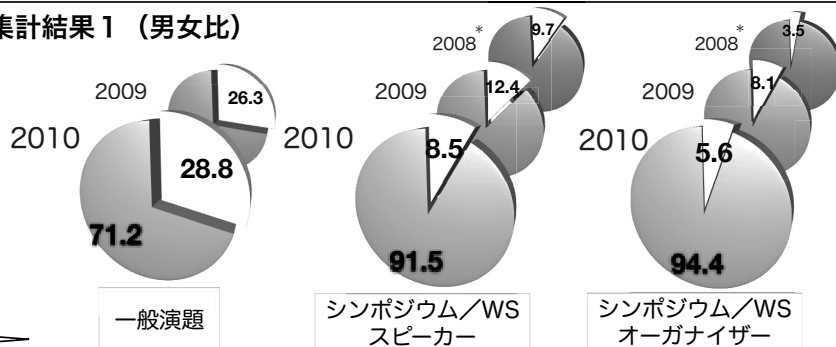
演題登録者数

一般演題（日本語）：5062名（生化学会33.4%、分子生物学会58.5%、両学会8.1%）
ワークショップ（WS）、シンポジウム：616名（WS 503名、シンポジウム 113名）

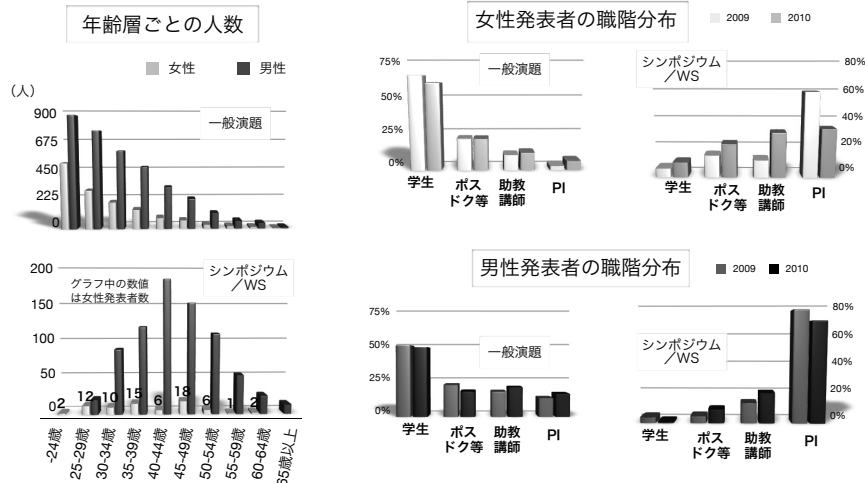
回答率

一般演題 : 96.4%
WS : 89.0%
シンポジウム : 93.8%

集計結果1（男女比）



集計結果2（年齢層、職階分布）



一般演題発表者の年齢層、職階分布は男女ともに同様の傾向を示した。
一方、シンポジウム/WSのスピーカーの職階分布は、男性はPIが圧倒的に多いのに対し、女性はポストドクからPIまでほぼ均等に分布しており、より若い世代にチャンスが与えられている傾向が伺えた。

まとめ

今後、オーガナイザーの回答率（今回約7割）の向上を図るための改善を含め、運用が容易で継続可能な属性調査プロトコルを確立し、経年的変化を評価するために調査を続行する。また、他学会にも同様の属性調査の実施を提案したい。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第17期新理事会準備会議記録

日 時：2010年10月15日(金) 16:30～18:20

場 所：東京国際フォーラム G棟 4階「407」

出席者：第16期

岡田清孝（第16期理事長）、石野史敏（第16期庶務幹事）

第17期

相沢慎一、阿形清和、審良静男、五十嵐和彦、大隅典子、影山龍一郎、小原雄治、小安重夫、白髭克彦、杉本亜砂子、月田早智子、永田恭介、中山敬一、花岡文雄、宮園浩平、柳田充弘、米田悦啓 以上17名（第17期理事）

委任状：石川冬木、上田泰己、貝淵弘三、五條堀孝、塩見春彦、田中啓二、谷口維紹、鍋島陽一、西田栄介、三浦正幸、水島 昇、山本雅之 以上12名（第17期理事）

欠席者：後藤由季子（第17期理事）

事務局：福田 博（記録）、並木孝憲、丸田夏子

本会議成立について：

石野史敏庶務幹事ならびに事務局より、本会議の開催の位置付け・成立につき、定款（抜粋）の説明がなされた。第17期理事会任期に入る前の準備会議ではあるが、その取り扱いが理事会に準ずることが確認された。17期理事17名が出席し、委任状12名を受理しており、本会議は細則第4章第8条により成立する旨、報告された。

議事録署名人の選任について：

岡田清孝第16期理事長より、議事録署名人として、相沢慎一17期理事と米田悦啓17期理事が指名され、承認された。

議 事：

1. 第17期理事長（任期：2011年1月より2年間）の選出

議事に先立ち、事務局より理事長選出に関する細則（第2章第3条）の説明が行われた。

議事進行については、被選挙権のない岡田理事長と石野庶務幹事が引き続き担当することが了承された。岡田理事長より是非フランクに自由に意見を提出してほしいとの要望がなされ、第17期理事による自由討論に入った。提出された意見は以下のようであった。

・ 昨年の事業仕分け以降、政府・行政へ発信する手段としてパブコメ等が重要になってきた。サイエンスをどのように社会へアピールするかを真剣に

考えている方を理事長に選びたい。

・ 昨年12月に開催した緊急フォーラムで、文科省からの出席パネリストより、行政への対応窓口を学会に設置するように求められた。16期理事会執行部の対応・取り組みを継続できる方が望ましいのではないか。

・ 会員数の推移や財政状態など、分子生物学会の運営はいたって堅調であるが、それとは別に、学会のあり方を本気で考えてくれる方が理事長に相応しい。

・ ここ数年、理事会で討議されてきた生化学会との関係を議論することは重要だが、数百名から始まった分子生物学会の生い立ちを無視することはできないだろう。30年前の理学部と医学部は体質が大きく違っていたわけであり、理学部系と医学部系のBiologyも違う。日本の研究環境における特殊性を考慮しなければならないだろう。

・ 特定非営利活動法人である分子生物学会と、例えば社団法人（公益社団法人・一般社団法人）などの法人とでは、根拠法となる法律そのものが異なるため、そもそも合併はできない。分子生物学会の特定非営利活動法人化は、研究助成事業や非営利事業については法人税の対象にはならないなど、会計的なメリットもあり、当面、現在の法人格で何ら支障はないといえる。

・ 生化学会が分子生物学会と合併したい理由を聞いてみたい。

・ 年会の合同開催を希望する会員の声があり、第16期将来計画検討委員会でも、年会のあり方（開催形式）につき検討を重ねてきたが、学会そのものの合併問題にふれたことはない。

・ もしも分子生物学会が生化学会と合併したら、おそらく会員数2万人を超すマンモス学会になってしまう。現在の規模がギリギリで、これ以上大きくなると埋没してしまう研究領域の学会もあり合併は避けるべきであろう。Federation化なら検討の余地がある。（分子生物学会はすでにFederation化しているという意見が多数あり）

・ 10月（生化学会）と12月（分子生物学会）といった近い時期に大きな学術集会（年会）が開催されることは、特に学生にとっては経済的負担が小さい。避けるべきである。

・ 分子生物学会と生化学会の両学会に所属する会員は（本年9月末時点の会員データ照合によると）約2,300名であった。15,500名を擁する分子生物

学会からすると、その割合は大きくないのではな
かろうか。その数字をどう見るか。おそらく 40
代半ば以上の会員が多いだろう。

- ・年会を生化学会と合同で開催してほしいとの意見
はかなり多いのではないか。
- ・生化学会とだけ合同で開催するのは理解できな
い。遺伝学会や細胞生物学会など、重複会員のい
る学会は他にもある。
- ・基本にかえって分子生物学会の将来像をどのよう
に描くかが重要ではないか。
- ・学会をどうするか、年会をどうするか、そういう
ことに問題意識のある方に理事長になってほし
い。
- ・生化学会との関係ばかりが議論されているので、
本論に戻したい。ちょうど今が過渡期であるとも
言えるだろう。あと 10 年もすればこの手の議論
をしなくなると思うが、molecular genetics から
始まった分子生物学会が、目指すべき方向をあら
ためて示す時期がきているのかもしれない。
- ・そもそも「分子生物学」に目指すものがあるのだ
ろうか。
- ・昨年の第 32 回年会では、分子生物学会の原点と
も言える「議論」というテーマを掲げ、多くの参
加者から好評を得た。
- ・自由闊達な雰囲気分子生物学会の特長でもあ
り、あまり堅苦しい目標を立てる必要はないの
ではないか。
- ・関連領域で活躍する研究者の多くが分子生物学会
には入っている。
- ・発生物学の分野では発生物学会には来ないで
分子生物学会に来る研究者層がかなりある。
- ・年会のあり方について、16 期の将来計画検討委
員会で確認されたことは、分子生物学会のオリジ
ナリティを尊重して、他学会との合同開催は 2 ～
3 年に 1 度とし、2 年連続しての合同開催は避け
ることが望ましいというものである。正式には、
12 月の 16 期理事会で検討されるものと理解し
ている。
- ・生化学会は、財政面などで大会の単独開催の難し
さを主張していると聞かすが、予算に見合った開催
方式を検討するなど、まずは自助努力が必要であ
る。
- ・ノーベル化学賞を受賞する日本人が多く、たしか
に化学は今後ますます重要になるだろう。ただ、
生化学会が化学をカバーしているとは考えにくい
かも知れない。それとは別に分子生物学会そのも
のが今後どうしていくかが重要であろう。
- ・生物科学学会連合（生科連）は機能しているとは

言えない。分子生物学会がどのようにコンセンサ
スを図るかを考えるべきである。

- ・野武士のような集団が分子生物学会の良いところ
であり、それが失われてしまうのは困る。
- ・英国では一人のサイエンスアドバイザーが科学
技術予算を決めている。それに対応するために、
Society of Biology が組織され、提言などを行うよ
うになった。（Federation 化への例示）
- ・世界的にみてもパブコメは重要。米国ではロビー
活動も大きな力を持っている。
- ・第 12 期以来、女性の会長（現制度での理事長）
が選出されていない。女性理事長の選出も考慮す
べきである。

活発な意見交換が行われた後、17 期理事により
投票が行われ、第 17 期理事長として小原雄治氏が
選出された。

2. 第 17 期副理事長の件

事務局より細則第 4 条（副理事長の設置）の説
明がなされた。小原第 17 期理事長より、本件につ
いては次回の 12 月理事会（16 期 17 期合同理事会）
の議案として、あらためて選任手続きを取りたいと
の要望が出された。第 17 期副理事長の選任（およ
び設置される人数）については、年会前日（12 月 6
日）の理事会で決定することとなった。

3. 第 16 期理事会執行部からの報告事項

・「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子
基金」の発足と若手研究者助成事業について
富澤純一博士（本学会名誉会員）と故・桂子夫人
より、分子生物学に関連する生命科学の基礎的な領
域において独創的な研究を行いつつあるが研究費に
恵まれない若手研究者の助成を目的として、本学会
へ多額（1 億 5400 万円）の私財のご寄付をいただ
いた旨、岡田理事長より報告がなされた。

第 16 期理事会ではこの寄付をありがたくお受け
し、基金運営委員会を立ち上げ、本年の年会時に若
手助成事業への応募要項を発表できるように準備を
進めている。詳細は基金運営委員会にて検討中であ
るが、対象は原則 39 歳以下の若手研究者（経歴な
どで特別な事情がある場合を除く）とし、毎年 5 名
程度の方に 1 名あたり約 300 万円を贈呈する予定で
ある。使途については、研究の推進に係関係してい
れば、かなり自由度の大きいものになる予定である。

「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子
基金」基金運営委員会メンバーは次のとおりである
（任期：2010.10.1 ～ 2014.12.31）。

山本正幸（委員長）、阿形清和、岡田清孝、近藤 滋、

塩見美喜子、嶋本伸雄、谷口維紹、任期中の理事長（職指定として17期理事長を委員委嘱）（以上8名）

現在、規程（若手研究助成制度ならびに基金運営委員会の運営（審査手続き）に関する規程）、募集のお知らせ（原稿案）、申請書式についてを、同委員会で持ち回り審議中であり、次回理事会で、最終確認が出来るように作業を進めている旨、岡田理事長より説明がなされた。

本事業の概要報告の後、出席者よりいくつかの質問が出され、岡田理事長ならびに事務局より説明が行われた。

さらに、「本当に将来性があるのに厳しい生活をしている若手を支援するためには、第三者が推薦する形にしないと、例えば、さきがけ、に申請するようなタイプの若手研究者が多数この基金に申請してくるのではないかな。それでは本来の趣旨と異なってしまうのではないかな。」との懸念が複数の理事から

出された。「現在、検討中の形式では、本人の申請のみが対象となっているので、推薦方式も可能にする申請様式が必要ではないか。」との意見が出された。本会議にて提出された意見については、阿形清和17期理事（基金運営委員を兼任）が山本正幸委員長に申し送ることとなった。

上記、第17期新理事会準備会議の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

2010年10月15日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
第17期新理事会準備会議
議長 岡田清孝 ㊟
議事録署名人 相沢慎一 ㊟
議事録署名人 米田悦啓 ㊟

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第16期第4回理事会記録

日時：2010年12月6日(月) 15:00～17:15

場所：神戸国際会議場 4階「403」

出席者：岡田清孝（理事長）、鍋島陽一（副理事長）、町田泰則（副理事長）、相沢慎一、荒木弘之、上村 匡（編集幹事兼）、貝淵弘三、影山龍一郎、片山 勉、塩見春彦（会計幹事兼）、篠崎一雄、篠原 彰、杉本亜砂子、田畑哲之、辻本賀英、正井久雄、水島 昇、山本正幸、渡邊嘉典、小川智子（監事）、吉川 寛（監事）、石野史敏（庶務幹事）、小林武彦（集会幹事）、宮園浩平（集会幹事）、小原雄治（第17期理事長）、花岡文雄（第34回年会長）、以上26名

欠席者：饗場弘二、審良静男、大隅良典、加藤茂明（広報幹事兼）、小安重夫、白髭克彦、永田恭介、長田重一、升方久夫、柳田充弘（Genes to Cells 編集長兼）、山中伸弥、谷口維紹（第33回年会長）、以上12名

事務局：福田 博（記録）、並木孝憲、丸田夏子

関係議題参加者：峰崎 愛

（第33回・第34回年会事務局より）

本理事会成立について：

石野史敏庶務幹事より、理事19名、監事2名、幹事3名、次期理事長および議題関係会員1名が出席し、委任状11名（理事）を受理しており、本理事会は細則第4章第8条により成立する旨、報告された。

議事録署名人の選任について：

岡田清孝理事長より、議事録署名人として、塩見春彦理事と杉本亜砂子理事が指名され、承認された。

議 事：

第16期理事会の最終会議となる本会合に先立ち、岡田理事長より謝辞が述べられた。

1. 報告事項

1) 執行部報告（理事長報告、庶務幹事報告）

・会員現況

石野史敏庶務幹事より、2010年12月1日現在の会員数につき以下のとおりに報告がなされた。

名誉会員 1名

正 会 員 9967名（海外在住含む）

学生会員 5346名（海外在住含む）

賛助会員 36社

合 計 15350名（前年12月対比、+107）

・科学技術予算、パブコメ対応、等について

昨年の事業仕分け評価から続いている科学技術予算全般への理事会对応であるが、本年6月、「学術の研究教育の転換期に当たって」と題して、会報とホームページに理事長メッセージを掲載した旨、岡田清孝理事長より報告がなされた。

9月末には、緊急のお知らせとして「来年度概算要求要望枠のパブコメについて」をホームページに掲載し、同時にパブコメ対応に関しての会員一斉メール配信を行った。また、11月

半ばには、日本化学会ほかとも協力し、30学会(39万会員)会長声明「日本国家存立の基盤となる高度人材育成と科学技術予算強化を求める」を発表したことが報告された。

2) 理事選挙結果報告/第17期理事長選任結果報告

石野庶務幹事より理事選挙結果の報告がなされた。また、2010年10月15日に東京で開催された第17期新理事会準備会議において、小原雄治氏が第17期理事長に選出されている旨報告された。

【第17期理事選挙結果】

選挙公示日：2010年6月15日(火)(会報96号発送)

投票期間：2010年6月21日(月)9:30

～7月9日(金)18:00

開票日：2010年7月15日(木)

開票場所：日本分子生物学会 事務局

開票立会人：選挙管理委員3名

(黒田真也、石野史敏、黒柳秀人)

有権者数：14,133名

投票者数：808名

投票総数：8,080票(うち白票1,875票)

当選者：下記30名(50音順)

相沢 慎一(理研・CDB) 杉本亜砂子(東北大・生命)
阿形 清和(京大・理) 田中 啓二(都臨床研)
審良 静男(阪大・IFReC) 谷口 維紹(東大・医)
五十嵐和彦(東北大・医) 月田早智子(阪大・生命機能)
石川 冬木(京大・生命) 永田 恭介(筑波大・基礎医学)
上田 泰己(理研・CDB) 中山 敬一(九大・生医研)
大隅 典子(東北大・医) 鍋島 陽一(先端医療財団・
先端医療センター/京大)
貝淵 弘三(名大・医) 西田 栄介(京大・生命)
影山龍一郎(京大・ウイルス研) 花岡 文雄(学習院大・理)
五條堀 孝(遺伝研) 三浦 正幸(東大・薬)
後藤由季子(東大・分生研) 水島 昇(東医歯大・医歯)
小原 雄治(遺伝研) 宮園 浩平(東大・医)
小安 重夫(慶應大・医) 柳田 充弘(京大/沖縄
科学技術研究機構)
塩見 春彦(慶應大・医) 山本 雅之(東北大・医)
白髭 克彦(東大・分生研) 米田 悦啓(阪大・生命機能)

3) 第8回日本分子生物学会三菱化学奨励賞選考結果報告

田畑哲之賞選考委員長より、標記奨励賞候補として14件の応募があり、委員会による審査・選考の結果、以下の2名が受賞者として決定したことが報告された。

○倉永英里奈(東京大学大学院薬学系研究科遺伝学教室)

【研究題目】

生体レベルにおけるカスパーゼの生理機能とその

制御メカニズムの遺伝学的解明

Exploring the regulatory mechanisms and physiological functions of caspase in vivo

○松林 嘉克(名古屋大学大学院生命農学研究科生理活性物質化学研究室)

【研究題目】

植物の成長制御に関与するペプチドホルモン群に関する研究

Molecular analysis of peptide hormones regulating plant growth and development

4) 各種学術賞、研究助成候補への学会推薦状況について

田畑賞推薦委員長より、2010年に本学会より推薦した各種学術賞について報告がなされた。引き続き、町田泰則研究助成選考委員長より、2010年の研究助成推薦状況と結果等について報告が行われた。

5) その他

・通常総会/議事進行と報告担当者の確認

石野庶務幹事より、第33回通常総会資料についての説明が行われ、総会当日の議事進行ならびに報告担当者の確認がなされた。岡田理事長より理事会関係者はできるだけ総会に出席してほしいとの要請がなされた。

2. 審議事項

1) 2010年度(平成22年度)収支決算承認の件

塩見春彦会計幹事より2010年度(平成22年度)会計の収支についての説明がなされた。黒字決算となったポイントは、①Genes to Cellsの出版収入、②第32回年会会計の収支繰入れ、③「事業費・予備費」および収支全体科目の「予備費」を使わなかったこと、の3点である。個々の事業収支についての説明がなされた後、本年度会計の重要なポイントである「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金会計」についても詳細な報告が行われた。

本決算においては、法人として消費税と地方税の計138万円を納めている。また税務処理全般については、顧問契約(税務顧問を含む)を交わしている税務専門家の指示のもと、収益事業部分の法人確定申告を行ったことが報告された。本決算は、11月2日に宮城秀敏公認会計士の監査を受け、配付資料のとおり監査報告書が提示されている。

財務諸表の説明がなされた後に、吉川寛監事より、11月11日に小川智子監事とともに学会事務所に会計監査会を実施し、金融機関の残高証明書等を一式確認、22年度決算を認めたことの報告がなされた。審議の結果、本決算は理事会で承認され、第33回通常総会に諮られることとなった。

なお、吉川監事から、収支科目の中で「事業費そ

の他」等の「その他、表記がやや多いので、予算編成の際には事業内容が具体的にわかるような名称を使用したほうがよいとの付帯意見が提出され、次々年度予算作成より留意することとなった。

さらに、吉川、小川両監事より、収支状況はたいへん健全ではあるがそれとは別件で、事務局職員の勤務状況（深夜残業と休日出勤があまりに多い）とその待遇につき、執行部は少し考慮するようにとの意見が提出された。この件については岡田理事長からも補足説明がなされ、現在の事務局3名体制では業務量が限界を超えており、来年以降、超過勤務、休日出勤を減らすためにも事務局スタッフの増員（当面は契約職員または長期アルバイトを検討中）の必要があることが説明され、本件については次期執行部に申し送られることとなった。

2) 2011年度（平成23年度）収支予算ならびに事業計画承認の件

塩見会計幹事より2010年度（平成22年度）の収支予算案、事業計画につき説明が行われ、審議の結果、同収支予算ならびに事業計画は理事会で承認され、第33回通常総会に諮られることとなった。

3) 第12回（2012年）春季シンポジウムについて

岡田理事長より2011年までの春季シンポジウム開催地資料が配付され、過去に開催していない地域であることを考慮し、第12回春季シンポジウム世話人は久保田健夫氏（山梨大学大学院医学工学総合研究部教授）に依頼したい旨が諮られ、承認された。

4) 将来計画検討委員会よりの提言について

山本正幸将来計画検討委員長より、任期中に計4回の会合を持ち、課せられた課題について検討を重ねてきたことが報告された。理事選挙投票率を高める問題、男女共同参画の推進（女性理事をいかに増やすか）については、既に具体的方策を実施済みである。

昨年からの継続議案となっていた2点、(1) 春季シンポジウムのあり方（あらたな国際シンポジウム企画の検討を含む）、(2) 年会のあり方、については、同委員会からの最終提言の形で以下のとおりの提出・報告がなされ、山本委員長からの詳細説明が行われた。

2010年12月6日

第16期 将来計画検討委員会 提言

第16期将来計画検討委員会において、2009年9月、11月、12月、2010年5月の計4回の会合を持ち、検討を重ねた。本日、『第16期 将来計画検討委員会 提言』を提出・報告します。

日本分子生物学会 第16期 将来計画検討委員会
山本正幸（委員長）、荒木弘之、篠原 彰、
杉本亜砂子、水島 昇、宮園浩平

●国際対応について（課題、基礎科学の現状認識/学会の役割、に関係して）

提言1：あらたな国際シンポジウム企画、ならびに、 春季シンポジウムのあり方について

- ・国際対応の一環として、今後、新しい国際シンポジウム企画を立ち上げることを提案したい。
- ・会期は年会前日の2日間とし、可能な限り、年会で確保している会場を融通させてもらうこととする。
- ・同国際シンポジウムは、年会とは独立したサテライトの位置付けとし、シンポジウムセッションとしては3つ程度（予算の目安は300万円×3テーマ）を企画し、2014年の年会より継続的に開催できることを目標にしたい。
- ・現行の春季シンポジウムについては、2013年以降は、理事会（理事長）からの世話人指名（依頼）ではなく、公募の形式に変えていき、またその実施も隔年開催といった選択肢もあり、新しい国際シンポジウム開催と合わせて、予算対応を図ることとしたい。

●年会のあり方（開催形式、年会長と理事会の責任分担等々）について

提言2：年会のあり方について

- ・本学会のオリジナリティを尊重して、他学会との合同開催は2～3年に1度とし、2年連続しての合同開催は避けることが望ましい。
- ・合同開催を実施する場合、そのパートナーとなる学会は幅広く視野に入れるよう、配慮することとしたい。
- ・年会長が年会運営のための組織委員会を設置するに際して、必要に応じて（年会長から要請があった場合）、年会長所属の1施設だけでなく、全国規模の複数の施設から組織委員を人選することも可能とする。
- ・海外招待講演者だけではなく留学生にも配慮し、一般論として、ゆるやかな英語化を進める必要があることを、理事会ならびに今後の年会長（年会組織委員会）への申し送りとしたい。
- ・本委員会においては、4回の会合を開催し、年会のあり方についての議論を重ねたが、ほぼ現状追認の検討結果となった。本提言については、5年後を目処に、再検討・見直しを行うことを申し送ることとする。

提出された提言の1、2それぞれにつき、活発な

意見交換が行われた。

討議の結果、第16期将来計画検討委員会からの提言内容を学会員に公表するとともに、小原雄治次期理事長および第17期理事会執行部への申し送り事項とすることを承認した。

5) 第35回(2012年)年会について

岡田理事長より、第35回年会会長は京都大学大学院理学研究科 阿形清和氏に依頼することが諮られ、承認された。

6) 第36回(2013年)年会について

岡田理事長より、第36回年会会長の選出については小原次期理事長へ申し送りたいとの説明がなされた。

7) 「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」若手研究助成事業について

本議案については、本日の会議進行の時間的な事情もあり、16期第4回理事会終了後に引き続き別室にて開催する、16期・17期合同理事会にて審議することとした。

上記、第16期第4回理事会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

2010年12月6日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
第16期第4回理事会

議 長	岡 田 清 孝	㊞
議事録署名人	塩 見 春 彦	㊞
議事録署名人	杉 本 亜砂子	㊞

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第16期・第17期合同理事会記録

日 時：2010年12月6日(月) 17:20～19:20

場 所：神戸国際会議場 4階「401 + 402」

出席者：第16期

岡田清孝(理事長)、鍋島陽一[○](副理事長)、町田泰則(副理事長)、相沢慎一[○]、荒木弘之、上村 匡(編集幹事兼)、貝淵弘三[○]、影山龍一郎[○]、片山 勉、塩見春彦[○](会計幹事兼)、篠崎一雄、篠原 彰、杉本亜砂子[○]、田畑哲之、永田恭介[○]、正井久雄、水島 昇[○]、山本正幸、渡邊嘉典、小川智子(監事)、吉川 寛(監事)、石野史敏(庶務幹事)、小林武彦(集会幹事)
([○]印は17期継続理事)

第17期

小原雄治(17期理事長)、阿形清和、石川冬木、上田泰己、五條堀孝、後藤由季子、田中啓二、谷口維紹(第33回年会会長)、月田早智子、中山敬一、花岡文雄(第34回年会会長)、三浦正幸、宮園浩平 以上36名

欠席者：第16期

饗場弘二、審良静男[○]、大隅良典、加藤茂明(広報幹事兼)、小安重夫[○]、白髭克彦[○]、辻本賀英、長田重一、升方久夫、柳田充弘[○](Genes to Cells 編集長兼)、山中伸弥、平尾 敦(2011春季シンポジウム世話人)
([○]印は17期継続理事)

第17期

五十嵐和彦、大隅典子、西田栄介、山本雅之、米田悦啓 以上17名

事務局：福田 博(記録)、並木孝憲、丸田夏子

関係議題参加者：峰崎 愛

(第33回・第34回年会事務局より)

本理事会成立について：

石野史敏庶務幹事より、理事32名、監事2名、幹事2名が出席し、委任状16名(理事)を受理しており、本理事会は細則第4章第8条により成立する旨、報告された。

議事録署名人の選任について：

岡田清孝理事長より、議事録署名人として、塩見春彦理事と杉本亜砂子理事が指名され、承認された。

議 事：

1. 報告事項

1) 執行部報告(理事長報告、庶務幹事報告)

・会員現況

石野史敏庶務幹事より、2010年12月1日現在の会員数につき以下のとおりに報告がなされた。

名誉会員 1名

正 会 員 9967名(海外在住含む)

学生会員 5346名(海外在住含む)

賛助会員 36社

合 計 15350名(前年12月対比、+107)

・第16期活動報告(全般)

岡田清孝理事長より、総会資料(1頁：2010年度事業報告)に基づき、第16期の活動概要全般につき報告が行われた。

昨年の事業仕分け評価から続いている科学技術予算全般への理事会対応であるが、本年6月、

「学術の研究教育の転換期に当たって」と題して、会報とホームページに理事長メッセージを掲載した。また9月末には、会員への緊急のお知らせとして「来年度概算要求要望枠のパブコメについて」をホームページに掲載し、同時にパブコメ対応に関しての会員一斉メール配信を行った。11月半ばには、日本化学会ほかとも協力し、30学会（39万会員）会長声明「日本国家存立の基盤となる高度人材育成と科学技術予算強化を求める」を発表したことが報告された。

- 2) 石野庶務幹事（平尾 敦世話人代理）より、第11回（2011年）春季シンポジウムの開催概要の報告がなされた。

- ・テーマ「分子生物学の明日 ―金沢シンフォニー」
- ・会 期：2011年5月25日(水)～26日(木)
- ・会 場：石川県立音楽堂（金沢市）

本シンポジウムは、北陸地方の分子生物学に関係する研究者にできるだけ多く参加してもらうことを大きなねらいとし、ひとつの領域に偏ることなく広くテーマを設定し、各分野の最先端で活躍している研究者に講演を依頼している。また、金沢大学がん研究所を母体とする金沢国際がん生物学シンポジウムを組み入れ（金沢大学との共催）、海外からの研究者を招聘し、International Session としてがん生物学の話題を提供する予定であるとの説明がなされた。

4月24日(日)には、金沢21世紀美術館（シアター21）にて市民公開講座を開催する。講演は小出五郎氏（科学ジャーナリスト・元NHK解説委員）と近藤 滋氏（阪大）に依頼している旨報告された。

- 3) 谷口維紹第33回年会長より配布資料に基づき準備状況の報告がなされた。一般演題投稿数は5385題（うちLate-breaking abstracts 投稿は229題）、事前参加登録は7,433名となり、順調に準備が進んでいる（最終的に約11,200名の参加者となった）。本合同大会においても、演題投稿画面および事前参加登録画面に、入力者の所属学会に関する項目を設定し、その集計結果資料が配布された。概要は以下のとおりである。

- ・BMB2010一般演題における発表者の所属学会分布

分子生物学会会員	3216 演題
生化学会会員	1743 演題
両学会の会員	426 演題
総演題数	5385 演題

- ・事前参加登録者所属学会分布（非会員を除く）

分子生物学会会員	3909 名
生化学会会員	2089 名
両学会の会員	1016 名
合 計	7014 名

合同大会終了翌日の12月11日には、神戸から東京大学安田講堂に会場を移して、BMB2010市民公開講座「広がる生命科学の世界 ―からだの形作りから病気の克服まで―」を開催する。司会を膳場貴子氏（TBSニュース23キャスター）に依頼し、4名のパネリストによる講演が行われる予定であることが報告された。

- 4) 花岡文雄第34回年会長より、2011年の年会開催企画案につき報告がなされた。

- ・会 期：2011年12月13日(火)～16日(金)の4日間
- ・会 場：パシフィコ横浜
- ・年 会 長：花岡文雄
- ・組織委員：永田恭介（組織委員長）、三浦正幸（プログラム委員長）、菅澤薫（財務・渉外委員長）、柳澤純（運営・庶務委員長）
プログラム委員 各分野を代表する全国の研究者42名

第34回年会（MBSJ2011）は「基礎研究と応用研究の基軸としての分子生物学」をテーマに、「分子からヒトへ ―メカニズムを知り、コントロールする―」のキャッチコピーのもとプログラムを企画していく。

本年会組織委員会では、拡大を続ける本学会の今後の在り方を考え、科学的な成果の分かり易い発信の視点から、またますます細分化しつつある研究状況に活路を拓くなどの視点から、年會を今までのプログラムとは異なる構成で進めている。その要点は、期間中の各日で、いくつかのテーマをくくった研究集会が複数並行して進行し、それぞれは一定の完結性を持った研究集会のように運営されるというようなイメージである。テーマの単位は、例年、年會の一般演題募集時に用いられてきた次の6つの大きな項目とした。

- 分子構造・生命情報
- 分子・複合体の機能
- 細胞の構造と機能
- 発生と再生および神経科学
- 疾患生物学
- 分子生物学的方法論、技術

上記の各大項目（以下「フレーム」と記載）の小項目ごとにプログラム委員が配置されており、これらのプログラム委員がフレームごとに、シンポジウム、ワークショップ、口頭発表の企画を立てていく予定である。

◆シンポジウムは、小項目横断的な、あるいはフレーム横断的な内容になることが期待される。

◆ワークショップは、個々のディシプリンや関連研究分野に焦点をあてたものとなる。視点を絞った横断型も可能である。口頭発表についても、プログラム委員の判断で企画性をもたせる工夫も可能性とする。

◆口頭発表はポスター発表の中から、小項目ごとに選抜することとする。

シンポジウム・ワークショップは、一部プログラム委員が先導する企画もあるが、多くは従来どおり会員の提案から選抜する予定（2011年2月号会報および年会ホームページにて募集告知）であることが報告された。

第34回年会においては、男女共同参画の実現と若手研究者の育成にも力を入れるという方針から、女性研究者や若手研究者をできるだけオーガナイザーやスピーカーに積極的に取り入れたいと考えている。さらに、前回の単独年会である32回年会を引き継ぐ形で、可能な限り英語を推奨する予定である旨、説明がなされた。

5) 岡田理事長より、第35回（2012年）年会については、阿形清和氏（京都大学）に年会長を依頼し、本日開催した16期第4回理事会で決定したことが報告された。

6) 上村匡編集幹事より、配布資料に基づき、学会誌『Genes to Cells』の編集報告が行われた。出版契約の改定から2期目となる2009年分の収支報告を出版社より受けており、学会誌発行に掛かる収支は引き続き安定している。

GTC誌に関する新たな取り組みとしては、著者が所定の費用を負担することで論文掲載と同時にオープンアクセスの設定が可能なサービス「Online Open」を導入しており、現在すでに6報が採用されている。また、日本分子生物学会三菱化学奨励賞の受賞を記念し、2009年からは受賞者が総説を投稿できるようになったが、「MBSJ MCC Young Scientist Award 2009 REVIEW」と題した受賞者の総説がすでに2010年9月号に掲載されているとの説明がなされた。本年6月号からは、日本語版目次（論文タイトル）の会員メール配信と学会ホームページでの公開を開始し、最新論文へのダイレクトリンクを可能にしたことが報告された。さらに資料に基づき、Online投稿数、各年月別投稿数、国別Accept & Reject率についての報告が行われた。

また、2011年よりGTC誌の表紙デザインが斬新的に一新される予定であり、新デザインを総会で発表する。投稿数は持ち直しつつあるが、引き続き、

理事各位には積極的な投稿をお願いしたいとの依頼がなされた。

7) 杉本亜砂子男女共同参画委員長より、BMB2010初日の12月7日、ランチョンワークショップ「男性の視点から見た男女共同参画」（日本初の“父親学校”を開いた、NPO法人ファザーリングジャパンの安藤哲也氏による講演）が開催されるので、理事各位においてもぜひ参加してほしいとの要請がなされた。

昨年の32回年会に引き続き、本年度の合同大会においても、一般演題発表者、シンポジウム/ワークショップのスピーカー、シンポジウム/ワークショップのオーガナイザーそれぞれの属性調査（男女比、年齢層分布、男女別職階分布）を行ったことが報告され、その属性統計資料が配付された。同資料は会場内の複数の場所で配付し、同時に広報ポスターも掲示される予定である。今後も経年的変化を評価するために本調査を続行することとし、同時に他学会にも同様の属性調査の実施を提案していきたいとの報告がなされた。

引き続き、配布資料に基づき、本委員会の歴史（2001/年会保育室設置WG、2002/男女共同参画WG～現在に至るまで）、活動内容、今後の検討事項等について説明がなされた。第16期の男女共同参画委員会は12月末で一旦任期満了となるが、第17期委員会の活動内容・委員会構成については、明日12月7日の委員会開催を経た後、小原次期理事長に相談しながら進めていきたいとの説明がなされた。

8) 水島昇若手教育問題ワーキンググループ座長より、合同大会2日目の12月8日、ランチョンセミナー形式で、「若手教育ランチョンセミナー2010 あなたの解釈は大丈夫？統計解析と研究ルール」が開催されることが報告された。第一部では「科学的実験と統計的実験の境界」と題して、手良向聡氏（京大病院探索医療センター）による講演を行う。第二部は、WG委員がパネリストとなり、参加者の意見をそのままりアルタイムで表示できるレスポンスシステム（今年はクリッカーを200台に増台）を導入して、相互討論ができる企画となっていることが報告された。

また、本ワーキンググループの企画のもと出版社とタイアップしてまとめてきた記事「正しい知識が捏造を防ぐ データを正確に解釈するための6つのポイント」（「蛋白質 核酸 酵素」2008-2009）を、本年3月に学会ホームページに掲載（出版社の許可のもとに転載）したことが報告された。

9) 学術事業企画委員会報告（学会創立30周年記念

出版事業)

永田恭介学術事業企画委員長より以下3部作の編集が順調に進んでいることの説明がなされた。“なぜなぜ生物学”については、本合同大会に印刷が間に合い、展示会場(書籍コーナー)での販売も開始される旨報告された(見本誌・回覧)。出版社からの直接購入であれば、3部作のすべてにつき会員は2割引で購入できる。

●“なぜなぜ生物学”2010年12月刊行

新書判 縦組 202ページ(定価1470円)

●“分子生物学に魅せられた人々”2011年3月刊行予定

四六判 縦組 約300ページ

●“21世紀の分子生物学”2011年10月刊行予定

本委員会では、さらに未来の分子生物学を担ってくれる子供たちを対象とした出版(学習研究社とのタイアップ出版企画「まんがでよくわかるシリーズ」)も検討してきたが、集めるべき協賛金の金額が非常に大きいため、昨今の経済状況を考慮し当面見送りとしたことが報告された。

10) 将来計画検討委員会報告

山本正幸委員長より第16期の将来計画検討委員会においては、任期中に計4回の会合を持ち、課せられた課題についての検討を重ねてきたとの報告がなされた。

理事選挙投票率を高める問題、男女共同参画の推進(女性理事をいかに増やすか)については、既に具体的方策を実施済みである。

昨年からの懸案となっていた課題2点、(1)春季シンポジウムのあり方(あらたな国際シンポジウム企画の検討を含む)、(2)年会のあり方、については、本日開催した16期第4回理事会に、以下の最終提言を提出し、本提言内容を学会員に公表するとともに、小原次期理事長および第17期理事会執行部への申し送り事項とすることが16期理事会で承認されている旨の報告がなされた。

2010年12月6日

第16期 将来計画検討委員会 提言

第16期将来計画検討委員会において、2009年9月、11月、12月、2010年5月の計4回の会合を持ち、検討を重ねた。本日、『第16期将来計画検討委員会 提言』を提出・報告します。

日本分子生物学会 第16期 将来計画検討委員会
山本正幸(委員長)、荒木弘之、篠原 彰、
杉本亜砂子、水島 昇、宮園浩平

●国際対応について(課題、基礎科学の現状認識/学会の役割、に關係して)

提言1: あらたな国際シンポジウム企画、ならびに、
春季シンポジウムのあり方について

- ・国際対応の一環として、今後、新しい国際シンポジウム企画を立ち上げることを提案したい。
- ・会期は年会前日の2日間とし、可能な限り、年会で確保している会場を融通させてもらうこととする。
- ・同国際シンポジウムは、年会とは独立したサテライトの位置付けとし、シンポジウムセッションとしては3つ程度(予算の目安は300万円×3テーマ)を企画し、2014年の年会より継続的に開催できることを目標にしたい。
- ・現行の春季シンポジウムについては、2013年以降は、理事会(理事長)からの世話人指名(依頼)ではなく、公募の形式に変えていき、またその実施も隔年開催といった選択肢もあり、新しい国際シンポジウム開催と合わせて、予算対応を図ることとしたい。

●年会のあり方(開催形式、年会長と理事会の責任分担等々)について

提言2: 年会のあり方について

- ・本学会のオリジナリティを尊重して、他学会との合同開催は2~3年に1度とし、2年連続しての合同開催は避けることが望ましい。
- ・合同開催を実施する場合、そのパートナーとなる学会は幅広く視野に入れるよう、配慮することとしたい。
- ・年会長が年会運営のための組織委員会を設置するに際して、必要に応じて(年会長から要請があった場合)、年会長所属の1施設だけでなく、全国規模の複数の施設から組織委員を人選することも可能とする。
- ・海外招待講演者だけではなく留学生にも配慮し、一般論として、ゆるやかな英語化を進める必要があることを、理事会ならびに今後の年会長(年会組織委員会)への申し送りとしたい。
- ・本委員会においては、4回の会合を開催し、年会のあり方についての議論を重ねたが、ほぼ現状追認の検討結果となった。本提言については、5年後を目処に、再検討・見直しを行うことを申し送ることとする。

上記の提言内容に関して、17期出席理事からいくつかの質問が出され、山本委員長、岡田理事長より補足説明が行われた。

11) 「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子

基金」若手研究助成事業について

山本基金運営委員長より、このたびの富澤純一博士からの寄付のお申し出（2010年4月）ならびに寄付行為に至るまでのいきさつ、16期執行部においての対応（6月）、理事会持ち回り審議（7月）、富澤基金設立・寄付金受領（8月）、そして基金運営委員会発足（2010年10月1日付）までの経緯につき、詳細説明がなされた。

11月19日に第1回基金運営委員会を開催し、・応募方式・応募資格・選考方法・研究助成金の使途ならびに会計処理・第一期委員の任期・規程、募集お知らせ原稿、申請書の確認・今後のスケジュール・広報一般、等々につき詳細な検討を行ったことが報告された。応募方式（自薦・他薦）については、新理事会準備会議（2010.10.15）からの提出意見を十分に考慮しながらも、最終的には、あくまで自己申請を基本とすることが委員会による合意となった（応募方式は自薦とし、どれだけ研究意欲・能力があるかということと、現実の研究資金の困難度の訴えを総合して、委員会が判定する）。

引き続き、配付資料（規程と募集要項（最終案）、募集お知らせ広報原稿、申請書）の確認が行われ、本理事会にて以下「特定非営利活動法人 日本分子生物学会 若手研究助成制度ならびに基金運営委員会の運営に関する規程」と「日本分子生物学会 富澤基金 若手研究助成 募集要項」が承認された。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 若手研究助成制度ならびに基金運営委員会の 運営に関する規程

1. 目的

日本分子生物学会は、分子生物学に関連する生命科学の基礎的研究の発展を期して、毎年若干名の将来性ある若手研究者に対し、研究助成金を贈呈する。当該研究助成事業を行うに際して必要な事項を定め、事業の適正な運営を図るために、本規程を制定する。

2. 研究助成金の趣旨

本研究助成金は、「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子 基金」に基づいて、分子生物学に関連する生命科学の基礎的な領域において独創的な研究を行いつつあり、かつ本研究助成金を受領することによって研究の特段の進展が期待できる若手研究者に対して助成する。

3. 基金運営委員会の設置、任務、構成

研究助成者の選考、および同基金の管理は、「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」基金運営委員会が行う。

1) 基金運営委員会は、理事会の承認のもとに設置さ

れる。

2) 基金運営委員会は、委員長1名、副委員長1名、および委員4ないし5名により構成される。さらに、任期中にある理事長は、同委員会に基金運営委員として加わるものとする。

3) 基金運営委員会委員の任期は、第1期については2010年10月1日～2014年12月31日とする。第2期（2015年1月1日～）以降の委員任期については、現委員会の任期終了前に、理事会にて検討を行い定めることとする。委員については、半数を超えない限りで再任を認める。

4. 助成者の選考

基金運営委員会は助成者の選考に当たる。書類審査（採点）の後、採用予定数の二倍を超えない数の候補者にヒアリングを実施し、総合結果に基づき基金運営委員会で合議の上、基金運営委員長が決定する。基金運営委員長は選考結果を日本分子生物学会理事会に報告する。選考に当たっては、本助成が申請者の研究の進展にどれだけ効果的に寄与できるかという観点にも配慮することとする。

ヒアリングには基金寄付者である富澤純一博士がオブザーバーとして同席できるものとする。

5. 助成への応募資格等

助成への応募資格、助成金額、助成金の使途、受領に伴う義務等については別途定める「日本分子生物学会 富澤基金 若手研究助成 募集要項」による。同要項は基金運営委員会が定め、日本分子生物学会理事会の承認を得るものとする。

6. 規程の改正

本規程の改正は理事会の承認を必要とする。
付記.

2010年12月6日、第16期・第17期 合同理事会において本規程を定め、同日より運用する。

日本分子生物学会 富澤基金 若手研究助成 募集要項

1. 助成への応募資格

- 1) 分子生物学に関連する生命科学の基礎的な領域において独創的な研究を行い、将来の発展を期待し得る39歳以下の若手研究者を対象とする。ただし、研究経歴において特別な事情がある場合は39歳を超えていても応募を受け付ける。
- 2) 日本分子生物学会の会員・非会員は問わない。
- 3) 申請者の単独研究、または申請者が中心になって行っている共同研究を対象とする。
- 4) 再度の応募を妨げない。

2. 助成金額

助成金額は、一人300万円。年度ごとの助成人数は

5 名。

(10 年間で総額 1 億 5000 万円を助成予定)

3. 研究助成金の使途、ならびに会計処理

- 1) 研究推進に関係することであれば、使途は限定しない。
- 2) 本助成金は直接研究費以外にも自由度をもって使用できるものとする。そのために、原則、研究助成金は一時所得扱いとし、学会が源泉徴収(50 万円を超える、250 万円につき 10%)を行う。
- 3) 採択決定者が助成金の全額または一部を所属研究機関の委任経理金扱いとすることを希望した場合には、それに対応する(当該部分については源泉徴収は行わない)。ただし本助成から間接経費の負担は行わない。

4. 贈呈式

研究助成採択者には、日本分子生物学会年会(総会)における贈呈式への出席を要請する。

5. 研究成果公表

本助成金を使用した研究成果を、学術雑誌等に公表する場合は、「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」

(Tomizawa Jun-ichi & Keiko Fund of Molecular Biology Society of Japan for Young Scientist) から助成を受けた旨を明記するものとする。

6. 研究成果および会計報告

- 1) 本助成金受領者は、助成金を受領した翌々年の 5 月末までに、研究成果と会計報告の概要を、「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子 基金」基金運営委員会あてに提出する。様式は問わない(一時所得扱いの受領者は、会計報告に際して、領収書の提出は不要。ただし使途の一覧を提出すること)。
- 2) 本研究助成の贈呈対象者として、相応しくない行為があった場合には、助成金の返還を求めることがある。

7. 規程の改正

本要項の改正は理事会の承認を必要とする。

付記。

2010 年 12 月 6 日、第 16 期・第 17 期 合同理事会において本要項を定め、同日より運用する。

第一期の「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子 基金」基金運営委員会は次のとおりである。

委員：阿形清和、岡田清孝(副委員長)、小原雄治、近藤 滋、塩見美喜子、嶋本伸雄、谷口維紹、山本正幸(委員長)

さらに、山本委員長より以下のとおりに作業スケジュールが報告された。

・合同大会の各会場にて、募集お知らせダイジェスト

版を配布、ポスターを掲示。

- ・第 33 回通常総会(12 月 8 日)にて、本研究助成事業の詳細を発表。
- ・文科省記者クラブへプレスリリース、全国の研究施設へ募集お知らせを発送。(12 月中旬)
- ・12 月下旬までに、学会 HP に詳細案内とダウンロード用書式を掲載。
- ・HP 掲載完了後に全会員へ一斉メール配信を実施。
- ・応募受付期間：2011 年 1 月 7 日(金)～1 月 31 日(月)

2. 審議事項

1) 第 17 期副理事長の選任

第 16 期理事が一旦退出した後、石野庶務幹事より副理事長選出に関する細則の説明がなされ、自由討論に入った。第 17 期出席理事により投票が行われ、副理事長として、相沢慎一氏と大隅典子氏が選任された。

2) 第 17 期監事の選任

小原第 17 期理事長から、第 17 期の監事として勝木元也会員、町田泰則会員が推薦され、承認された。監事選任については第 33 回通常総会で最終承認をとることとなる。

3) 第 17 期各幹事、各種委員会の委員長および委嘱について

小原第 17 期理事長より、役員・幹事・各委員会名簿(案)が配付され、承認された。

小原新理事長より、17 期理事会では広報幹事の役割・担当業務を広くし、広報幹事を二人体制にして執行部メンバーに入ってもらい、社会への情報発信、科学研究教育・政策、要望書・提言など、様々な案件に迅速に対応できるようにしたいとの説明がなされた。16 期からの持ち越しとなっている、科学研究教育・政策等に対応するための新委員会をすぐに発足させるのではなく、理事長、庶務幹事、広報幹事(2 名)からなる執行部 4 名体制にて機動的に対応していきたいとの方針が示され、提案どおりに承認された。

男女共同参画委員会については、杉本亜砂子理事に委員長を再任してもらい、塩見春彦理事に副委員長を担当してもらうこととした。杉本委員長からは活動内容を検証し、委員会業務を効果的に進められるような工夫をしたいとの考えが示され、委員会構成については、12 月 7 日の男女共同参画委員会開催の後、杉本委員長から第 17 期の活動方針、委員会メンバー案を提出してもらい、理事長、委員長、副委員長で最終決定とすることが確認された。

また、本日現在、確定していないもう 1 名の集会幹事については、2012 年の阿形年会長よりしかるべき時期までに理事長あて集会幹事を推薦してもら

い、決定する予定である。

4) 第16期から第17期への申し送り事項

- ・学会発 日本語オンラインジャーナル（総合レビュー誌）について

第16期の将来計画検討委員会において、幾度か、PNEに代わるオンラインジャーナル（日本語の総合レビュー誌）について議論してきたが、関連分野の他学会と同様に、本学会もその対応については、慎重に様子をみてきた。

本年11月、ライフサイエンス統合データベースセンター（DBCLS）の飯田啓介氏（元PNE編集長）より、その後の動向についての連絡があったことが岡田理事長より報告された。本年9月1日にトップジャーナルに掲載された日本人を著者とする生命科学分野の論文について、論文の著者自身の執筆による日本語のレビュー（総説）を、いち早く公開する「ライフサイエンス新着論文レビュー」（<http://first.lifesciencedb.jp/>）がスタートした。公開からの約2カ月で50本近いレビューが公開されているとのことで、本学会における前向きな協力を引き続き検討してほしいといった依頼である。本件については、次期理事会への申し送り事項としたい旨、岡田理事長より報告された。

さらに意見交換がなされ、この「新着論文レビュー」は学会発の日本語オンラインジャーナルのモデルケースあるいはプロトタイプとなる可能性はあるが、DBCLSの来年度以降の活動が不透明なこともあるので、17期理事会においても慎重に対応する必要があることが確認され、17期執行部へ申し送られた。

5) その他

出席理事より、第35回（2012年）年会について、その開催形式と、「第16期将来計画検討委員会 提言」（報告事項の10）参照）との関係についていくつかの質問が出された。山本委員長および岡田理事長より、本提言は、年会長から要請があれば、理事長と執行部、そして理事会は、年会長を全面的にサポートしていくという立場を明らかにするためのものであり、年会開催形式について年会長に委ねられている自由度/裁量は従来どおりで、年会長の方針が最大限に尊重されるとの説明があった。

岡田理事長より、年会開催形式については、個別の学会との関係で検討するのではなく、サイエンスベースで考えることが重要であるとの考えが示された。引き続き、2012年の福岡年会の開催形式について、多くの様々な意見が提出され、活発な意見交換が行われた。

最後に、阿形第35回年会長より、各学会はそれぞれに年会を行うことが基本スタンスであり、合同年会を行うことは一切考えていない旨の方針が示された。これにより2012年の年会は単独開催となり、第17期執行部が必要なサポートをしていくこととした。

上記、第16期・第17期 合同理事会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

2010年12月6日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
第16期・第17期合同理事会

議 長	岡 田 清 孝	㊞
議事録署名人	塩 見 春 彦	㊞
議事録署名人	杉 本 亜砂子	㊞

特定非営利活動法人日本分子生物学会 平成 23 年度 (第 33 回) 通常総会記録

日 時：平成 22 年 12 月 8 日(水) 14：30～15：20

場 所：神戸国際会議場 3 階 国際会議室 (第 13 会場)

社員数 (正会員+名誉会員)：9,968 名

出席者数：5089 名 (本人出席 59 名、表決委任者 5,030 名)

議事内容：

1. 岡田清孝理事長より開会の挨拶がなされた。
2. 定款第 25 条に基づき、岡田理事長より本総会議長として篠原 彰会員が指名された。さらに定款第 29 条に基づき、議事録署名人として、嶋本伸雄会員、升方久夫会員が選任された。
3. 篠原議長より、定款第 26 条(総会の定足数)に基づき、上記表決委任者(委任状)を含めて出席 5,089 名となり、本総会は成立する旨報告された。
4. 経過報告 (事業報告)

1) 理事長報告

岡田清孝理事長より、総会資料 (1 頁：2010 年度事業報告) に基づき、事業の活動全般につき報告が行われた。

○科学技術予算全般への対応

昨年の事業仕分け評価から続いている科学技術予算全般への理事会対応であるが、本年 6 月、「学術の研究教育の転換期に当たって」と題して、会報とホームページに理事長メッセージを掲載した。9 月末には、会員への緊急のお知らせとして「来年度概算要求要望枠のパブコメについて」をホームページに掲載し、同時にパブコメ対応に関しての会員一斉メール配信を行った。また、11 月半ばには、日本化学会ほかとも協力し、30 学会 (39 万会員) 会長声明「日本国家存立の基盤となる高度人材育成と科学技術予算強化を求める」を発表したことが報告された。

○第 12 回 (2012 年) 春季シンポジウムについて

12 月 6 日開催の理事会にて、2012 年の春季シンポジウムは、久保田健夫教授 (山梨大学) を世話人とし、甲府で開催されることが決定した。

○学会創立 30 周年記念出版事業

今期、学術事業企画委員会 (永田恭介委員長) によって、学会創立 30 周年記念出版事業を進めてきたが、以下 3 部作の編集が順調に進んでいる。“なぜなぜ生物学” については、本合同大会に印刷が間に合い、展示会場 (書籍コーナー) での販売も開始されている。

● “なぜなぜ生物学” 2010 年 12 月刊行

● “分子生物学に魅せられた人々” 2011 年 3 月

刊行予定

● “21 世紀の分子生物学” 2011 年 10 月刊行予定

○将来計画検討委員会 提言について

第 16 期理事会においては、2 期ぶりに将来計画検討委員会を発足し、いくつかの重要な課題についての検討を行ってきた。理事選挙投票率を高める問題、男女共同参画の推進 (女性理事をいかに増やすか) については、既に具体的方策を実施済みである。

12 月 6 日開催の理事会にて、昨年からの継続議案となっていた 2 点、(1) 春季シンポジウムのあり方 (あらたな国際シンポジウム企画の検討を含む)、(2) 年会のあり方、について、同委員会からの最終提言が提出された。同理事会において、第 16 期将来計画検討委員会からの提言内容を学会員に公表するとともに、次期理事長および第 17 期理事会執行部への申し送り事項とすることが承認されたことの報告がなされた。提言は以下のとおりである。

2010 年 12 月 6 日

第 16 期 将来計画検討委員会 提言

第 16 期将来計画検討委員会において、2009 年 9 月、11 月、12 月、2010 年 5 月の計 4 回の会合を持ち、検討を重ねた。本日、『第 16 期将来計画検討委員会 提言』を提出・報告します。

日本分子生物学会 第 16 期 将来計画検討委員会
山本正幸 (委員長)、荒木弘之、篠原 彰、
杉本亜砂子、水島 昇、宮園浩平

●国際対応について (課題、基礎科学の現状認識 / 学会の役割、に関係して)

提言 1：あらたな国際シンポジウム企画、ならびに、春季シンポジウムのあり方について

- ・国際対応の一環として、今後、新しい国際シンポジウム企画を立ち上げることを提案したい。
- ・会期は年会前日の 2 日間とし、可能な限り、年会で確保している会場を融通させてもらうこととする。
- ・同国際シンポジウムは、年会とは独立したサテライトの位置付けとし、シンポジウムセッションとしては 3 つ程度 (予算の目安は 300 万円×3 テーマ) を企画し、2014 年の年会より継続的に開催できることを目標にしたい。
- ・現行の春季シンポジウムについては、2013 年以降は、理事会 (理事長) からの世話人指名 (依頼)

ではなく、公募の形式に変えていき、またその実施も隔年開催といった選択肢もあり、新しい国際シンポジウム開催と合わせて、予算対応を図ることとしたい。

●年会のあり方（開催形式、年会長と理事会の責任分担等々）について

提言2：年会のあり方について

- ・本学会のオリジナリティを尊重して、他学会との合同開催は2～3年に1度とし、2年連続しての合同開催は避けることが望ましい。
- ・合同開催を実施する場合、そのパートナーとなる学会は幅広く視野に入れるよう、配慮することとしたい。
- ・年会長が年会運営のための組織委員会を設置するに際して、必要に応じて（年会長から要請があった場合）、年会長所属の1施設だけでなく、全国規模の複数の施設から組織委員を選任することも可能とする。
- ・海外招待講演者だけではなく留学生にも配慮し、一般論として、ゆるやかな英語化を進める必要があることを、理事会ならびに今後の年会長（年会組織委員会）への申し送りとしたい。
- ・本委員会においては、4回の会合を開催し、年会のあり方についての議論を重ねたが、ほぼ現状追認の検討結果となった。本提言については、5年後を目処に、再検討・見直しを行うことを申し送ることとする。

○第35回（2012年）年会について

12月6日に開催された理事会において、第35回（2012年）年会については、阿形清和氏（京都大学）に年会長をお願いすることが決定した。

○第17期理事長について

2010年10月15日に開催された第17期新理事会準備会議において、小原雄治氏が第17期理事長に選出されている旨報告された。

2) 庶務報告

石野史敏庶務幹事より会員現況につき報告が行われた。

会員現況：〔2010年12月1日現在〕名誉会員1名、正会員9,967名、学生会員5,346名、賛助会員36団体、総計15,350名

3) 編集『Genes to Cells』報告

上村匡編集幹事より Genes to Cells の刊行状況全般につき報告がなされた。

新たな取り組みとして、著者が所定の費用を負担することで論文掲載と同時にオープンアクセスの設定が可能なサービス「Online Open」を導入しており、

現在すでに6報が採用されている。また、日本分子生物学会三菱化学奨励賞の受賞を記念し、2009年からは受賞者が総説を投稿できるようになったが、「MBSJ MCC Young Scientist Award 2009 REVIEW」と題した受賞者の総説がすでに2010年9月号に掲載されている。本年6月号からは、日本語版目次（論文タイトル）の会員メール配信と学会ホームページでの公開を開始し、最新論文へのダイレクトリンクを可能にしたことが報告された。

2011年よりGTC誌の表紙デザインが一新される予定であり、2011年Volume 16, Issue 1, の表紙デザインがスライド発表された。会員各位においては引き続き、積極的な投稿をお願いしたい。

4) 「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」の設立と若手研究助成事業について

山本正幸基金運営委員長より、このたびの富澤純一博士からの寄付のお申し出と寄付行為に至るまでのいきさつ、富澤基金設立、そして基金運営委員会発足までの経緯につき、報告がなされた。

本研究助成金の趣旨の説明に続き、配布資料『第1回（2011年）日本分子生物学会 若手研究助成 募集のお知らせ』に基づき、第1回募集内容（助成金額、応募資格、研究助成金の使途ならびに会計処理、応募受付期間等）につき詳細説明が行われた。応募要項（ダウンロード版申請書）は、12月下旬に分子生物学会ホームページに掲載するので、助成希望の方は奮って応募されたい。

5) 第11回（2011年）春季シンポジウムについて

石野庶務幹事（平尾敦世話人代理）より、標記シンポジウムの開催概要の報告がなされた。

- ・テーマ「分子生物学の明日－金沢シンフォニー」
- ・会 期：2011年5月25日(水)～26日(木)
- ・会 場：石川県立音楽堂（金沢市）

本シンポジウムは、北陸地方の分子生物学に関係する研究者にできるだけ多く参加してもらうことを大きなねらいとし、ひとつの領域に偏ることなく広くテーマを設定し、各分野の最先端で活躍している研究者に講演を依頼している。金沢大学がん研究所を母体とする金沢国際がん生物学シンポジウムを組み入れ（金沢大学との共催）、海外からの研究者を招聘し、International Session としてがん生物学の話題を提供する予定である。

4月24日(日)には、金沢21世紀美術館（シアター21）にて市民公開講座を開催予定である旨報告された。

5. 議 事

1) 平成22年度（2010年度）収支決算承認の件

塩見春彦会計幹事より22年度決算の収支内容に

つき詳細報告が行われた。本決算の監査については、以下のように報告された。

2010年11月2日、公認会計士 宮城秀敏氏の会計監査を受け（独立監査人の監査報告書を参照）、同年11月11日に、小川智子監事、吉川 寛監事の監査を受けた。

審議の結果、本決算は異議なく承認された。

2) 平成23年度（2011年度）収支予算ならびに事業計画承認の件

塩見会計幹事より23年度の収支予算案、事業計画につき説明が行われた。

審議の結果、同収支予算ならびに事業計画は異議なく承認された。

3) 第17期監事選任の件

定款第14条に基づき、岡田理事長より第17期監事として勝木元也会員、町田泰則会員が推薦され、承認（選任確認）された。

6. 谷口維紹第33回年会長より、年会開催状況につき報告がなされた。

一般演題投稿数は5,385題（うちLate-breaking abstracts 投稿は229題）、本日現在（12月8日）の参加者数は9,588名（うち事前参加登録は7,433名）となり、順調に年会運営が進んでいることが報告された（最終的に約11,200名の参加者となった）。

引き続き、第33回年会（BMB2010）の特色となった、プレナリーレクチャー、パイオニアズレクチャー、シンポジウム／ワークショップの概要につき説明がなされた。

合同大会終了翌日の12月11日には、神戸から東京大学安田講堂に会場を移して、BMB2010 市民公開講座「広がる生命科学の世界ーからだの形作りから病気の克服までー」を開催する。司会を膳場貴子氏（TBS ニュース23 キャスター）に依頼し、4名のパネリストによる講演が行われる予定であるので、ぜひ市民公開講座にも参加いただきたい。

7. 花岡文雄第34回年会長より、2011年の年会開催企画案につき報告がなされた。

- ・会 期：2011年12月13日（火）～16日（金）の4日間
- ・会 場：パシフィコ横浜
- ・年 会 長：花岡文雄
- ・組織委員：永田恭介（組織委員長）、三浦正幸（プログラム委員長）、菅澤薫（財務・渉外委員長）、柳澤純（運営・庶務委員長）
- プログラム委員 各分野を代表する全国の研究者42名

第34回年会（MBSJ2011）は「基礎研究と応用研究の基軸としての分子生物学」をテーマに、「分子からヒトへーメカニズムを知り、コントロールするー」のキャッチコピーのもとプログラムを企画していく。

本年会組織委員会では、拡大を続ける本学会の今後の在り方を考え、科学的な成果の分かり易い発信の視点から、またますます細分化しつつある研究状況に活路を拓くなどの視点から、年会を今までのプログラムとは異なる構成で進めている。その要点は、期間中の各日で、いくつかのテーマをくくった研究集会が複数並行して進行し、それぞれは一定の完結性を持った研究集会のように運営されるというようなイメージである。テーマの単位は、例年、年会の一般演題募集時に用いられてきた次の6つの大きな項目とした。

- 分子構造・生命情報
- 分子・複合体の機能
- 細胞の構造と機能
- 発生と再生および神経科学
- 疾患生物学
- 分子生物学的方法論、技術

上記の各大項目のなかで、小項目ごとにプログラム委員が配置されており、これらのプログラム委員が大項目ごとに、シンポジウム、ワークショップ、口頭発表の企画を立てていく予定である。

シンポジウム・ワークショップは、一部プログラム委員が先導する企画もあるが、多くは従来どおり会員の提案から選抜する予定（2011年2月号会報および年会ホームページにて募集告知）であることが報告された。

第34回年会においては、男女共同参画の実現と若手研究者の育成にも力を入れるという方針から、女性研究者や若手研究者をできるだけオーガナイザーやスピーカーに積極的に取り入れたいと考えている。さらに、前回の単独年会である32回年会を引き継ぐ形で、可能な限り英語を推奨する予定である旨、説明がなされた。

8. 篠原議長より閉会の挨拶があり、第33回総会が終了した。

上記、平成23年度通常総会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

平成22年12月8日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
平成23年度通常総会
議 長 篠 原 彰 ㊞
議事録署名人 嶋 本 伸 雄 ㊞
議事録署名人 升 方 久 夫 ㊞

平成 22 年度（2010 年度）収支決算報告

平成 22 年度（2010 年度）収支決算報告書

平成 21 年 10 月 1 日から平成 22 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	予算額	決算額	備 考
I 収入の部			
1 入会金収入	800,000	1,890,000	
正 会 員	200,000	558,000	
学生会員	600,000	1,332,000	
2 会費収入	71,270,000	70,001,009	
正 会 員（海外在住含む）	58,500,000	57,707,009	
学生会員（海外在住含む）	11,250,000	10,734,000	
賛助会員	1,520,000	1,560,000	
3 事業収入	221,500,000	229,089,871	
①分子生物学・学術研究事業	213,500,000	214,292,380	
年会	209,000,000	212,543,369	第 32 回年会（年会収入合計額－本部補助金定額分 500 万円）
春季シンポジウム	4,500,000	1,749,011	第 10 回春季シンポジウム（スクール形式）
②普及啓発事業（HP・刊行物等）	8,000,000	14,797,491	
Genes to Cells 出版収入	8,000,000	14,797,491	Profit Share 14,340,880 円 2009 年編集費精算（出版社）
③その他の事業	0	0	残額 456,611 円
その他の事業	0	0	
4 助成金・補助金収入	1,300,000	1,300,000	三菱化学より（奨励賞副賞、選考経費）
5 雑収入・預金利息	200,000	193,024	利息収入、出版社著作権管理機構からの分配金
当期収入合計（A）	295,070,000	302,473,904	
前期繰越収支差額	133,557,275	133,557,275	
収入合計（B）	428,627,275	436,031,179	
II 支出の部			
1 事業費	242,100,000	231,215,609	
①分子生物学・学術研究事業	223,500,000	217,449,259	〈学術集会の開催等〉
年会	214,000,000	210,195,779	第 32 回年会（年会支出小計）
春季シンポジウム	9,500,000	7,253,480	第 10 回春季シンポジウム（松島）
②普及啓発事業（HP・刊行物等）	11,050,000	9,771,070	
会報刊行費	4,000,000	3,279,570	会報 94、95、96 号
Genes to Cells 編集費	1,000,000	314,500	編集委員会懇親会費用（3 月 1 日）＊編集経費については
Genes to Cells オンライン費用	4,350,000	4,350,000	年 900 万円まで出版社負担
ホームページ関係費	1,700,000	1,827,000	ホームページ 10 万円× 12 カ月＋メール配信費用
③その他の事業	7,550,000	3,995,280	
三菱化学奨励賞関係費	1,300,000	1,019,635	
男女共同参画事業費	1,500,000	757,073	
創立 30 周年記念・出版事業	1,000,000	1,421,163	学術事業企画委員会 出版インタビュー費用
事業費その他	2,000,000	483,909	・若手教育 WG 422,409 円・生科連会費、2009 緊急フォーラム
理事選挙	250,000	313,500	選挙システムブラウザ調整費/ テープ起こし等 61,500 円
事業費・予備費	1,500,000	0	
2 管理費	46,850,000	46,375,432	
事務所賃料	2,800,000	2,536,249	賃料・共益費、光熱費
給与手当	21,000,000	22,526,554	
法定福利費	2,800,000	2,735,140	社会保険料・雇用保険等事業者負担分
福利厚生費	50,000	32,586	職員健康診断等
業務委託費	1,500,000	1,356,600	公認会計士監査料、会計事務所顧問料、税務申告費用
会員管理システム運用管理費	2,400,000	2,263,044	会員管理サーバの運用・保守
印刷費	1,500,000	1,715,627	総会資料、総会委任状ハガキ、会費請求書の出力等含む
通信運搬費	10,000,000	9,614,190	
旅費交通費	2,300,000	1,606,450	
会議費	500,000	308,104	理事会、将来計画検討委員会 他
支払手数料	300,000	226,215	
消耗品費	850,000	779,543	封筒印刷代含む
雑費	700,000	581,552	海外会費クレジットカード決済手数料、外部倉庫代、その他
減価償却費	150,000	93,578	電話機、コピー FAX 複合機
3 租税公課	3,000,000	1,381,300	納税済 763,800 円 未払消費税 547,500 円 地方税 70,000 円
4 特定預金支出	1,100,000	1,134,000	退職給付引当金繰入（規程に準拠）
5 予備費	2,000,000	0	
当期支出合計（C）	295,050,000	280,106,341	
当期収支差額（A）-（C）	20,000	22,367,563	
次期繰越収支差額（B）-（C）	133,577,275	155,924,838	

（単位：円）

平成 22 年度（2010 年度）貸借対照表

平成 22 年 9 月 30 日現在

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額		
I 資産の部			
1 流動資産			
現金預金	303,595,737		
前払費用	4,659,907		
立替金	7,023,284		
流動資産合計		315,278,928	
2 固定資産			
工具器具備品	84,341		
差入保証金	614,180		
固定資産合計		698,521	
資産合計			315,977,449
II 負債の部			
1 流動負債			
未払金	82,657		
未払法人税等	70,000		
未払消費税	547,500		
前受会費	464,500		
前受金	1,000,000		
預り金 1 （若手研究助成 富澤基金）	153,985,300		
預り金 2	186,154		
仮受金	16,500		
流動負債合計		156,352,611	
2 固定負債			
退職給付引当金	3,700,000		
固定負債合計		3,700,000	
負債合計			160,052,611
III 正味財産の部			
前期繰越正味財産		133,557,275	
当期正味財産増加額		22,367,563	
正味財産合計			155,924,838
負債及び正味財産合計			315,977,449

（単位：円）

平成 22 年度（2010 年度）財産目録

平成 22 年 9 月 30 日現在

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額	
I 資産の部		
1 流動資産		
現金預金		
現金	260,142	
郵便振替 00170-5-592854	2,673,136	
郵便振替 00100-2-465016	48,660	
郵便振替 00110-1-901302	26,793,620	
普通預金 三菱東京 UFJ 銀行 春日町支店	1,203,270	
普通預金 三菱東京 UFJ 銀行 所沢支店	6,359,523	
普通預金 三菱 UFJ 信託銀行 上野支店	202,463	
普通預金 三井住友銀行 飯田橋支店	35,707,003	
普通預金 中央三井信託銀行 本店営業部	7,109,676	
普通預金 静岡銀行 東京支店	53,985,300	
定期預金 三菱東京 UFJ 銀行 春日町支店	10,098,882	
定期預金 みずほ銀行 本郷支店	10,078,889	
定期預金 三井住友銀行 飯田橋支店	10,000,000	
定期預金 三菱 UFJ 信託銀行 上野支店	10,000,000	
定期預金 中央三井信託銀行 本店営業部	10,000,000	
定期預金 住友信託銀行 東京営業部	19,075,173	
定期預金 静岡銀行 東京支店	100,000,000	
前払費用 事務所家賃 10 月分	211,949	
前払費用 事務所火災保険 H22.10-H24.8 月分	23,958	
前払費用 10/15 新理事会準備会議 会場費	49,500	
前払費用 2010 年分 Genes to Cells オンライン費用	4,350,000	
前払費用 2011 年春季シンポジウム会場費	24,500	
立替金 編集経費（2010 年 1 月分以降）	7,023,284	
流動資産合計		315,278,928
2 固定資産		
工具器具備品 電話取付一式	70,483	
工具器具備品 複合機	13,858	
差入保証金 事務所	564,180	
差入保証金 編集室	50,000	
固定資産合計		698,521
資産合計		315,977,449
II 負債の部		
1 流動負債		
未払金 通信運搬費 9 月分 （外部倉庫、宅急便代、NTT、メールサーバ）	37,501	
未払金 印刷費（コピー・FAX 代 9 月分）	11,346	
未払金 クレジットカード決済処理手数料（GMO）	33,810	
未払法人税等	70,000	
未払消費税	547,500	
前受会費 平成 23 年度以降会費	464,500	
前受金 GTC 編集費・出版社補助金	1,000,000	
預り金 1 若手研究助成 富澤基金	153,985,300	
預り金 2 源泉所得税	186,154	
仮受金 2011 年分 GTC（印刷版）購読料	16,500	
流動負債合計		156,352,611
2 固定負債		
退職給付引当金	3,700,000	
固定負債合計		3,700,000
負債合計		160,052,611
III 正味財産の部		
前期繰越正味財産	133,557,275	
当期正味財産増加額	22,367,563	
正味財産合計		155,924,838
負債及び正味財産合計		315,977,449

（単位：円）

「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」

平成 22 年（2010 年度）会計報告

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

●平成 22 年度（2010 年度）富澤基金 決算報告書

平成 22 年 8 月 4 日から平成 22 年 9 月 30 日まで
（＊ 8 月 4 日、基金専用口座を開設）

科 目	決 算 額	備 考
収入の部		
寄付金収入	154,000,000	富澤純一博士と故・桂子夫人より、8 月 24 日、 寄付金受領.
預金利息	0	
当期収入合計	154,000,000	
支出の部		
研究奨励金	0	研究助成事業は平成 23 年度より開始予定. 貸金庫使用料（静岡銀行東京支店にて通帳管理）
選考経費	0	
事務・雑費	14,700	
当期支出合計	14,700	
次期繰越金	153,985,300	

●平成 22 年度（2010 年度）富澤基金 貸借対照表

平成 22 年 9 月 30 日現在

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
資産の部		負債の部	
普通預金	53,985,300	流動負債	0
定期預金	100,000,000	基金会計（期首）	154,000,000
		今年度収支差額	-14,700
		基金正味財産	153,985,300
合 計	153,985,300	合 計	153,985,300

●平成 22 年度（2010 年度）富澤基金 財産目録

平成 22 年 9 月 30 日現在

科 目	摘 要	金 額
普通預金	静岡銀行 東京支店	53,985,300
定期預金	静岡銀行 東京支店	100,000,000
合 計		153,985,300

平成 22 年度（2010 年度）個別注記表

平成 21 年 10 月 1 日から平成 22 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

1. 固定資産の減価償却の方法
定率法によっております。
2. 固定資産の減価償却累計額
871,506 円
3. 退職給付引当金の計上基準
職員の退職給付に備えるため、当年度末における退職給付債務の見込額に基づき、
当年度末において発生していると認められる額を計上しております。
4. 担保に供している資産はありません。
5. 保証債務はありません。

【監査報告】

平成 22 年度（2010 年度）決算に関して、平成 22 年 11 月 2 日、独立監査人 宮城秀敏公認会計士の監査を受けました。その計算書類が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、平成 22 年度の収支及び正味財産増減の状況並びに同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。との監査報告書の提出を受けました。その後、同年 11 月 11 日に、学会事務所において、小川智子監事、吉川寛監事による監査を終了しました。（両監事による会計監査は、帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きにより行われた。）ここにご報告いたします。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

第 16 期理事長 岡 田 清 孝

理事（会計幹事）塩 見 春 彦

監査報告書

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
理事長 岡田 清孝 殿

平成22年11月11日
特定非営利活動法人 日本分子生物学会

監事

吉川 晃

平成22年11月11日
特定非営利活動法人 日本分子生物学会

監事

小川 智子

私たちは、日本分子生物学会の平成22年度における財産並びに収支の状況について監査を行った。帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて計算書類の正確性を検討した結果、計算書類は、財産並びに収支の状況を正しく示していると認める。

以上

独立監査人の監査報告書

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
理事長 岡田 清孝 殿

平成22年11月2日

宮城公認会計士事務所

公認会計士

宮城 有紀

私は、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の 平成21年10月1日から平成22年9月30日までの平成22年度の計算書類、すなわち、収支決算報告書、貸借対照表及び財産目録並びに平成22年8月4日から平成22年9月30日までの平成22年度の富澤基金 会計報告、すなわち、富澤基金 決算報告書、貸借対照表及び財産目録について監査を行った。この計算書類及び会計報告の作成責任は理事者にあり、私の責任は独立の立場から計算書類及び会計報告に対する意見を表明することにある。

私は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、私に計算書類及び会計報告に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。監査は、試査を基礎として行われ、理事者が採用した会計方針及びその適用方法並びに理事者によって行われた見積もりの評価も含めた全体としての計算書類及び会計報告の表示を検討することを含んでいる。私は、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

私は、上記の計算書類及び会計報告が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の平成22年度の収支、正味財産増減の状況及び同年度末日現在の財政状態並びに 富澤基金 の平成22年度の収支及び同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 と私との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

平成 23 年度（2011 年度）収支予算

平成 23 年度（2011 年度）収支予算

平成 22 年 10 月 1 日から平成 23 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	23 年度予算	備 考
I 収入の部		
1 入会金収入	<u>1,000,000</u>	
正 会 員	200,000	1,000 円 × 200 名
学生会員	800,000	1,000 円 × 800 名
2 会費収入	<u>71,190,000</u>	
正 会 員（海外在住含む）	58,500,000	6,500 円 × 10,000 名 × 約 90%
学生会員（海外在住含む）	11,130,000	3,000 円 × 5,300 名 × 約 70%
賛助会員	1,560,000	40,000 円 × 39 口（36 社）
3 事業収入	<u>196,180,000</u>	
①分子生物学・学術研究事業	<u>186,680,000</u>	〈学術集会の開催等〉
年会	186,180,000	第 33 回年会（BMB2010）案分繰入れ（310,300,000 円 × 60%）
春季シンポジウム	500,000	
②普及啓発事業（HP・刊行物等）	<u>9,500,000</u>	
Genes to Cells 出版収入	9,000,000	ワイリーブラックウェル社より Profit Share 800 万円、編集定額補助金 100 万円
30 周年記念出版収入	500,000	著作権使用料（東京化学同人）
③その他の事業	<u>0</u>	
その他の事業	0	
4 助成金・補助金収入	<u>1,300,000</u>	三菱化学より、奨励賞副賞および選考経費として
5 雑収入	<u>200,000</u>	利息収入、出版社著作権管理機構分配金等
当期収入合計（A）	269,870,000	
前期繰越収支差額	155,920,000	※ 22 年度決算の繰越金概算とした。
収入合計（B）	425,790,000	
II 支出の部		
1 事業費	<u>214,830,000</u>	
①分子生物学・学術研究事業	<u>196,680,000</u>	〈学術集会の開催等〉
年会	186,180,000	第 33 回年会（BMB2010）案分繰入れ（310,300,000 円 × 60%）
々	5,000,000	定額補助金支出
春季シンポジウム	5,500,000	市民公開講座費用を含む
②普及啓発事業（HP・刊行物等）	<u>12,350,000</u>	
会報刊行費	4,000,000	
Genes to Cells 編集費	2,000,000	学会負担分（編集費用 1000 万円のうち 800 万円は出版社負担精算へ）
Genes to Cells オンライン費用	4,350,000	ワイリーブラックウェル社へ支払い（フリーアクセス料 100 万円を含む）
ホームページ関係費	2,000,000	10 万円 × 12 カ月、メール配信 60 万円、予備費 20 万円
③その他の事業	<u>5,800,000</u>	
三菱化学奨励賞関係費	1,300,000	
男女共同参画事業費	1,500,000	
創立 30 周年記念・出版事業	1,000,000	3 企画の学会買取分（各 100 部）約 53 万円を含む、学術事業企画委員会
事業費その他	1,000,000	若手教育 WG 活動費含む
理事選挙	0	
事業費・予備費	1,000,000	
2 管理費	<u>50,790,000</u>	
事務所賃料	2,800,000	賃料、管理費、光熱費等含む
給与手当	23,500,000	事務局人件費、繁忙期のアルバイト雇用含む
法定福利費	2,900,000	社会保険料・雇用保険等事業者負担分
福利厚生費	50,000	雇用職員健康診断等
業務委託費	1,500,000	公認会計士監査料、会計事務所顧問料、税務申告費用
会員管理システム運用管理費	2,500,000	サーバー運用保守、UFJ 社決済基盤使用料含む
システム開発費（カード決済）精算分	960,000	2011 年度会費より国内会員についてもカード決済に対応
印刷費	1,700,000	会費請求書出力含む
通信運搬費	10,000,000	会報、年会プログラム集、会費請求書の送料
旅費交通費	2,300,000	理事会、委員会、執行部打合せ、他
会議費	500,000	理事会、委員会、他
支払手数料	300,000	
消耗品費	900,000	封筒印刷代含む
雑費	800,000	国内・海外会費クレジットカード決済手数料、外部倉庫代、他
減価償却費	80,000	電話機、コピー FAX 複合機
3 租税公課	<u>2,000,000</u>	消費税、法人税等
4 特定預金支出	<u>1,150,000</u>	退職給付引当金
5 予備費	<u>1,000,000</u>	
当期支出合計（C）	269,770,000	
当期収支差額（A）-（C）	100,000	
次期繰越収支差額（B）-（C）	156,020,000	

学術賞、研究助成の本学会推薦について

本学会に推薦依頼あるいは案内のある学術賞、研究助成は、本号に一覧として掲載しております。そのうち、応募にあたり学会等の推薦が必要なものについての本学会からの推薦は、本学会賞推薦委員会または研究助成選考委員会の審査に従って行います。応募希望の方は、直接助成先に問合わせ、申請書類を各自お取寄せのうえ、ふるってご応募下さい。

本学会への推薦依頼の手続きは次の通りです。

1. 提出物

- 1) 本申請に必要な書類（オリジナルおよび募集要項に記載されている部数のコピー）
- 2) 本学会の選考委員用および学会用控に、上記申請書類のコピー計6部
- 3) 申込受付確認のための返信封筒（返信用の宛名を記入しておいて下さい）
- 4) 論文（別刷は各種財団等応募先の必要部数をご用意下さい。委員会用の論文は不要です）

2. 提出先

※賞推薦についての送付先

日本分子生物学会・賞推薦委員長 小安 重夫
〒102-0072 千代田区飯田橋3-11-5
20 山京ビル 11 階
日本分子生物学会事務局気付

※研究助成についての送付先

日本分子生物学会・研究助成選考委員長 西田 栄介
〒102-0072 千代田区飯田橋3-11-5
20 山京ビル 11 階
日本分子生物学会事務局気付

3. 提出期限

財団等の締切りの1カ月前まで。提出期限後に受取った場合や、提出書類が不備な場合は、選考の対象にならないことがあります。推薦手続きのことでご不明な点がございましたら、学会事務局までお問い合わせ下さい。

研究助成一覧

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第42回三菱財団自然科学研究助成	(財)三菱財団 ☎ (03) 3214-5754 〒100-0005 千代田区丸の内2-3-1	総額2億5,000万円、 40件程度	2011年 2月2日	1件当たり 2,000万円まで	自然科学の基礎となる独創的、かつ先駆的研究とともに、すぐれた着想で新しい領域を開拓する萌芽ともなる研究（原則として個人研究）。
新化学発展協会平成23年度研究奨励金	(社)新化学発展協会 ☎ (03) 5297-8820 〒101-0041 千代田区神田須田町1-12	9課題、 各課題1件	2011年 1月31日	1件 100万円	新化学の発展に資する若手研究者（39歳以下）の研究に対して、研究奨励金を交付。研究課題有り。
山田科学振興財団2011年度研究援助	(財)山田科学振興財団 ☎ (06) 6758-3745 〒544-8666 大阪市生野区巽西1-8-1	15件程度 (本学会の 推薦枠は5件)	2011年 3月31日	1件当たり 100～500万円、 総額3,000万円	自然科学の基礎的研究に対しての研究費援助。 「推薦書は山田財団HPよりダウンロード http://www.yamadazaidan.jp/ 」
第27回国際生物学賞	国際生物学賞委員会 ☎ (03) 3263-1722 〒102-8471 千代田区一番町6 日本学術振興会内	1件 (1件)	2011年* 5月13日	賞状、賞牌、 1,000万円	生物学の研究において世界的に優れた業績を挙げ、世界の学術進歩に大きな貢献をした研究者。第26回の授賞分野は「共生の生物学」。
第28回持田記念学術賞	(財)持田記念医学薬学振興財団 ☎ (03) 3357-1282 〒160-0003 新宿区本塩町7-6 四谷ワイズビル	2件以内 (1件)	2011年* 7月29日	1件 1,000万円	生命科学・薬物科学・情報科学と医療応用の研究の分野における研究で、顕著な功績があり、かつ新進気鋭の研究者。
第29回研究助成		総額 2億4,000万円	2011年* 6月24日	1件 300万円	
第28回国内および海外留学補助金		総額 1,000万円	2011年* 6月24日	1件 50万円	
平成24年度笹川科学研究助成	(財)日本科学協会 ☎ (03) 6229-5365 〒107-0052 港区赤坂1-2-2 日本財団ビル	約330件	募集期間 2011年* 10月1日 ～ 10月15日	1件当たり100万円まで	人文・社会科学および自然科学（医学を除く）の研究計画に関するもの。4月1日現在、35歳以下の若手研究者へ助成。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
上 原 賞	(財)上原記念生命科学財団 ☎ (03) 3985-3500 〒 171-0033 豊島区高田 3-26-3	2 件以内 (1 件)	2011 年 * 9 月 8 日	金牌、 2,000 万円	生命科学の栄養学、薬学、基礎 および臨床医学、社会医学、東 洋医学で顕著な業績を挙げ、引 き続き活躍中の研究者。
第 28 回井上學術賞	(財)井上科学振興財団 ☎ (03) 3477-2738 〒 150-0036 渋谷区南平台町 15-15-601	5 件以内 (2 件)	2011 年 * 9 月 20 日	賞状、金メダル、 200 万円	自然科学の基礎的研究で特に顕 著な業績を挙げた者（ただし締 切日現在満 50 歳未満）。
第 4 回井上リサーチ アワード		3 名以内 (うち 1 名以上 女性研究者)	2011 年 * 7 月 29 日	1 人当たり 1,000 万円 (期間は 2 年)	開拓的發展を目指す若手研究者 の独創性と自立を支援する目的 で、研究を助成。期間は 2 年。
第 20 回木原記念財団 學術賞	(財)木原記念横浜生命科学振興財団 ☎ (045) 502-4810 〒 230-0045 横浜市鶴見区末広町 1-6	1 件 (1 件)	2011 年 * 9 月 30 日	賞状、記念牌、 200 万円	最近において生命科学の分野で 優れた独創的研究を行っている 国内の研究者で、原則として締 切日現在 50 歳以下の者。
木原記念財団特別賞 (平成 20 年より新設)		1 件 (1 件)	2011 年 * 9 月 30 日	賞状、記念牌、 100 万円	生命科学の分野で独創的かつ社 会的貢献に繋がる研究を行って いる若手研究者で 50 歳以下の 者。推薦の研究課題で他の著名 な賞を受けていない者。
住友財団 2011 年度基 礎科学研究助成	(財)住友財団 ☎ (03) 5473-0161 〒 105-0012 港区芝大門 1-12-6 住友芝大門ビル 2 号館	総額 1 億 6,000 万円 100 件程度	2011 年 * 6 月 30 日	1 件当たり 500 万 円まで	理学(数学、物理学、化学、生物学) の各分野及びこれらの複数にまた がる分野の基礎研究で萌芽的 なもの。若手研究者(個人または グループ)を対象とする。
第 52 回藤原賞	(財)藤原科学財団 ☎ (03) 3561-7736 〒 104-0061 中央区銀座 3-7-12	2 件 (1 件)	2011 年 1 月 31 日	副賞 1,000 万円	推薦の対象は自然科学分野に属 するもの。わが国に国籍を有し、 科学技術の発展に卓越した貢献 をした者。
平成 24 年度科学技術 分野の文部科学大臣 表彰科学技術賞およ び若手科学者賞	文部科学省 研究振興局振興企画課奨励室 ☎ (03) 6734-4071 〒 100-8959 千代田区霞が関 3-2-2	科学技術賞 140 件(年)のうち、 研究部門は 40 件程度 若手科学者賞 は 100 名程度 (学会推薦枠は 定まっていな いが推薦は若 干名まで)	2011 年 * 7 月 15 日	表彰状及び副賞	我が国の科学技術の発展等に寄 与する可能性の高い独創的な研 究又は発明を行った個人又はグ ループを表彰。 萌芽的な研究、独創的視点に立 った研究等、高度な研究開発能 力を示す顕著な研究業績を挙げ た 40 歳未満の若手研究個人。
平成 23 年度島津賞	(財)島津科学技術振興財団 ☎ (075) 823-3240 〒 604-8445 京都市中京区 西ノ京徳大寺町 1	1 件 (推薦枠は若干件)	2011 年 * 9 月 30 日	賞状、賞牌、 副賞 300 万円	科学技術、主として科学計測お よびその周辺の領域における基 礎的な研究において、近年著し い成果をあげた功労者を対象と する。
島津科学技術振興財 団研究開発助成		総額 1,000 万円	2011 年 * 9 月 30 日	1 件当たり 100 万円以下	上記同様を研究対象とする、国 内の研究機関に所属する 45 歳以 下の新進気鋭の日本人研究者。
東レ科学技術賞	(財)東レ科学振興会 ☎ (047) 350-6103 〒 279-8555 浦安市美浜 1-8-1 東レビル	2 件前後 (2 件)	2011 年 * 10 月 7 日	1 件につき 賞状、金メダル、 500 万円	学術上の業績顕著な者、学術上 重要な発見をした者、重要な発 明により効果が大きい者、技術 上の重要問題を解決し貢献が大 きい者。
東レ科学技術研究助 成		総額 1 億 3,000 万円 10 件程度 (2 件)	2011 年 * 10 月 7 日	特に定めず最大 3,000 万円程度 まで	今後の研究の成果が科学技術の 進歩・発展に貢献するところが 大きいと考えられる、独創的、 萌芽的な研究を活発に行ってい る若手研究者(原則として 45 歳 以下)。
ノバルティス研究奨 励金	(財)ノバルティス科学振興財団 ☎ (03) 5464-1460 〒 106-0031 港区西麻布 4-16-13 西麻布 28 森ビル 10F	約 35 件 指定機関から の推薦必要	2011 年 * 9 月 15 日	1 件 100 万円	生物・生命科学およびそれに関 連する化学の領域における創造 的な研究に対して助成。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第 43 回内藤記念科学振興賞	(財)内藤記念科学振興財団 ☎ (03) 3813-3005 〒 113-0033 文京区本郷 3-42-6 NKD ビル 8 階	1 件 (1 件)	2010 年 * 10 月 1 日	金メダル、 1000 万円	人類の健康の増進に寄与する自然科学の基礎的研究において、独創的テーマに取り組み、その進歩発展に顕著な功績を挙げた研究者。
第 43 回海外学者招へい助成金		(前期・後期各 10 件)	2010 年 * 6 月 1 日・ 10 月 1 日	1 件 20～80 万円 まで (エリアによる)	同上のテーマに取り組み、国際的に高い評価を得ている外国の研究者を招へいする受入れ責任者に贈呈。
ブレインサイエンス財団研究助成	(財)ブレインサイエンス振興財団 ☎ (03) 3273-2565 〒 104-0028 中央区八重洲 2-6-20	8～12 件	2011 年 * 10 月 14 日	1 件 100 万円	ブレインサイエンス研究分野における独創的な研究計画への助成。
塚原伸見記念賞		1 件		1 件 100 万円	生命科学の分野において優れた独創的研究を行っている 45 歳以下の研究者。
海外派遣研究助成		若干件	2012 年 * 1 月 13 日	1 件 30 万円まで	ブレインサイエンスの研究の促進を図るため、国際学会、シンポジウム等への参加、あるいは短期間の研究者の派遣を助成。
海外研究者招聘助成		若干件		1 件 30 万円まで	同分野において独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の招聘を助成。
平成 24 年度研究助成	(財)長瀬科学技術振興財団 ☎ (06) 6535-2117 〒 550-8668 大阪市西区新町 1-1-17	10 数件	2011 年 * 11 月 30 日	1 件 250 万円以内	生化学および有機化学等の分野において研究活動を行う研究者または研究機関。
第 8 回日本学術振興会賞	(独)日本学術振興会 ☎ (03) 3263-1762 〒 102-8472 千代田区一番町 8 番地	20 件程度 (機関長推薦 扱いとして 学会推薦枠 も若干件あり)	2011 年 * 5 月中旬 (受付日指定)	賞状、賞碑、 110 万円	人文、社会科学及び自然科学にわたる全分野が対象。博士の学位を取得しており、国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により学術上特に優れた成果を上げたと認められた研究者 (45 歳未満)。
第 2 回日本学術振興会育志賞		16 件程度 (1 件)	2011 年 * 8 月 1 日	賞状、賞碑、 110 万円	我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程の学生を顕彰。
(財)材料科学技術振興財団 山崎貞一賞	(財)材料科学技術振興財団 ☎ (03) 3415-2200 〒 157-0067 世田谷区喜多見 1-18-6	各分野 1 件	2011 年 4 月 30 日	賞状、金メダル、 300 万円	授賞対象は、「材料」、「半導体及び半導体装置」、「計測評価」、「バイオサイエンス・バイオテクノロジー」の 4 分野からなり、論文の発表、特許の取得、方法・技術の開発等を通じて、実用化につながる優れた業績をあげている者。
平成 23 年度研究助成	(財)光科学技術研究振興財団 ☎ (053) 454-0598 〒 430-0926 浜松市中区砂山町 325-6	総額 4,000 万円	2011 年 * 8 月 31 日	助成金総額 約 4,000 万円	光科学に関係する研究に対して助成。対象課題有り。
2011 年度朝日賞	(財)朝日新聞文化財団 ☎ (03) 5540-7453 〒 104-8011 中央区築地 5-3-2	ここ最近 は 4～5 件 (1 件)	2011 年 * 8 月 31 日	正賞(ブロンズ像) と副賞 500 万円	学術、芸術などの分野で傑出した業績をあげ、わが国の文化、社会の発展、向上に多大の貢献をされた個人または団体に贈られる。
第 23 回加藤記念研究助成	(財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団 ☎ (042) 725-2576 〒 194-8533 町田市旭町 3-6-6	25 件 総額 5,000 万円	2011 年 * 8 月 31 日	1 件 200 万円	バイオサイエンス分野における有能な若手研究者を発掘し、その創造的かつ先駆的研究を支援する。年齢制限あり。

●件数の () 内は、応募に当たり学協会等からの推薦が必要な場合、本学会の推薦枠を示しています。

* は、本年度の案内を受取っておらず、昨年締切日を参考に示してあります。
締切日を過ぎているものは、本年度応募は終了していますが、参考資料として掲載しました。

●学会推薦した会員が財団等の研究助成対象者となった場合には、その研究成果を将来、学会誌「Genes to Cells」に論文あるいは総説として発表して頂くように要請いたします。応募に際しては、その旨をご了解くださるようお願いいたします。

各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ

○第14回マリンバイオテクノロジー学会大会 開催のお知らせ

第14回マリンバイオテクノロジー学会大会を下記の要領で開催いたします。

会 期：平成23年5月28日(土)～29日(日)

会 場：グランシップ

(静岡県コンベンションアーツセンター)

大会役員：大会会長 高野二郎

東海大学理学部化学科

実行委員長 齋藤 寛

東海大学海洋学部水産学科

大会事務局：〒424-8610

静岡県静岡市清水区折戸3-20-1

東海大学海洋学部内

第14回マリンバイオテクノロジー学会大会実行委員会

TEL：054-334-0411 FAX：054-334-5095

E-MAIL：marinebio14@ml.tokai-u.jp

大会の内容：

1. 一般講演（口頭発表、ポスター発表）

2. シンポジウム（一般）

*シンポジウムの企画を公募致します。シンポジウムの企画をご希望の方は大会事務局までご連絡下さい。

発表形式：

1. 口 頭 発 表：一般講演は質疑含み15分

液晶プロジェクター使用

2. ポスター発表：学生を対象とした優秀ポスターの表彰を予定

一般講演のセッション：

1. 微生物 2. 微細藻 3. 海藻・付着生物

4. 魚介類 5. 天然物化学・未利用資源

6. バイオミネラライゼーション 7. マリンゲノム

8. 環境・環境適応 9. その他

発表申込みの締め切り：平成23年3月11日(金)必着

講演要旨の締め切り：平成23年3月31日(木)必着

事前参加登録締め切り：平成23年4月30日(土)必着
講演申し込み方法および参加登録方法の詳細は、大会ホームページでご確認下さい。

第14回ホームページアドレス：準備中

学会ホームページ：<http://www.soc.nii.ac.jp/jsmb/>

○第15回 国際分子・植物・微生物相互作用学会 XV International Congress on Molecular Plant-Microbe Interactions

会 期：2011年8月2日(火)～6日(土)

会 場：国立京都国際会館

U R L：<http://mpmi2011.umin.jp/>

Twitter：@MPMIKyoto

組織委員長：島本 功(奈良先端大)

開催趣旨：

本学会は、植物と病原性微生物あるいは共生微生物との相互作用を分子レベルで解明することを目的としています。得られた成果は、食糧の安定的な確保や植物由来エネルギー植物の生産に重要な知見を提供します。また、世界各国より1,000名程度の参加者が来場することが予想され、植物科学分野においても最も大きな国際学会のひとつとなっています。

今回、欧米以外の地域での初めての開催となり、研究人口の多い欧米の研究者に加えて、現在急速に研究者の増えている日本、中国、韓国などのアジアの研究者が一堂に会して発表、討論を行うことにより、アジア地域における本研究分野の研究が将来飛躍的に進展するきっかけになる事が期待されています。皆様奮ってご参加下さい。

Confirmed speakers：

Jeff Dangl (USA)

Jean Dénarié (France)

Maria Harrison (USA)

Sheng Yang He (USA)

Jonathan Jones (UK)

Sophien Kamoun (UK)

Gregory Martin (USA)

Paul Schulze-Lefert (Germany)

Brian J Staskawicz (USA)

Jens Stougaard (Denmark)

Jian-min Zhou (China)

セッション：

1. Recognition and signaling I/II

2. Symbiosis I/II

3. Plant-oomycete/fungal interactions

4. Plant-Nematode interactions

5. Pathogenic fungi

6. Pathogenic bacteria/phytoplasma
7. Genomics and evolution of virulence in pathogenic fungi/oomycetes
8. Endophytes and parasitic plants
9. Effector proteins
10. Plant-virus/viroid interactions
11. Cell wall modification and resistance
12. Plant Response
13. Evolution of susceptibility and resistance
14. Biocontrol interactions
15. Systems biology
16. Plant hormones integrating defense response
17. Biotechnology
18. Structural biology
19. Crop protection

お問い合わせ先：

〒 630-0192

奈良先端大 奈良県生駒市高山町 8916-5

TEL：0743-72-5501 FAX：0743-72-5502

E-mail：mpmikyoto2011@bs.naist.jp

URL：http://mpmi2011.umin.jp/

XV International Congress on Molecular Plant-
Microbe Interactions

At Kyoto, Japan, on August 2-6, 2011

URL：http://mpmi2011.umin.jp/

Twitter：@MPMIKyoto

日本分子生物学会 賛助会員一覧

(2011 年 2 月 1 日現在)

アサヒビール株式会社 食の基盤技術研究所
株式会社アドバンテージ・サイエンス
株式会社エー・イー企画
沖縄科学技術研究基盤整備機構 事業推進部
科学技術振興機構 研究基盤情報部 バイオインフォマティクス課
科研製薬株式会社 創薬研究部
協和発酵キリン株式会社 研究本部研究推進部
株式会社コクサン
コスモ・バイオ株式会社 開発部
産業技術総合研究所 北海道センター図書室
ジャスコインタナショナル株式会社 第二事業部営業一課
住友化学株式会社 農業化学品研究所
第一三共株式会社 抗体医薬研究所
タカラバイオ株式会社 バイオインダストリー部
武田バイオ開発センター株式会社 プロジェクトマネジメント部
株式会社ダスキン開発研究所
田辺三菱製薬株式会社 研究本部研究企画部
東洋紡績株式会社 ライフサイエンス事業部
株式会社トミー精工
ナカライテスク株式会社 技術営業部広報課
日本甜菜製糖株式会社 総合研究所第二グループ
日本ベクトン・ディッキンソン株式会社 BD バイオサイエンス
日本たばこ産業株式会社 植物イノベーションセンター
日本たばこ産業株式会社 たばこ中央研究所
浜松ホトニクス株式会社 システム営業部
ヒゲタ醤油株式会社 研究開発部
日立公共システムエンジニアリング株式会社
富士レジオ株式会社 研究開発部門研究支援グループ
フナコシ株式会社
株式会社ボナック
三菱化学株式会社 RD 戦略室
ヤマサ醤油株式会社 R&D 管理室
ライフテクノロジーズジャパン株式会社
ロシュ・ダイアグノスティックス株式会社 AS 事業部
湧永製薬株式会社 湧永満之記念図書館
和研薬株式会社 大阪センター営業推進部

〈50 音順〉

■日本分子生物学会第 11 回春季シンポジウムの公式サイトが開設されています。

URL: <http://www.kanazawa-u.ac.jp/~ganken/mbsj-spring2011/>

■第 34 回（2011 年）日本分子生物学会年会ホームページが公開されています。

URL: <http://www.aeplan.co.jp/mbsj2011/>

特定非営利活動法人

日本分子生物学会 事務局

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 3-11-5

20 山京ビル 11 階

TEL: 03-3556-9600 FAX: 03-3556-9611

E-mail: info@mbsj.jp

分子生物学会は 2008 年に創立 30 周年を迎えましたが、これを記念し、

1. **その歴史を留め**(分子生物学に魅せられた人々)、
2. **分子生物学の現在と将来を概観・展望し**(21世紀の分子生物学)、
3. **次なる世代にその魅力を伝える**(なぜなぜ生物学)

ことを目的に、以下の3部作の出版を企画いたしました。



なぜなぜ生物学

新書判 縦組 202ページ 定価 1470 円

中学生・高校生とその家族、あるいは生物を専攻しなかった社会人の方々がふと思う「いのち」にかかわる「なぜ？」について、分子生物学の最先端で活躍している研究者が対話形式でやさしく答えます。「いのち」の不思議を解く面白さを一人でも多くの人に知ってもらい、次の時代の分子生物学を担う若者の参入を期待します。



<目次> 遺伝子とパソコンソフトはどこが違うの？(五十嵐和彦)／なぜ肥満と痩せになるの？(島野 仁)／なぜ親子は似るの？(正井久雄)／なぜ癌になるの？(花岡文雄)／どうして心臓は左にあるの？(松崎文雄)／雄と雌ってなにが違うの？(諸橋憲一郎)／どうして毎年のようにインフルエンザに罹るの？(永田恭介)／なぜ地球環境にいいことをグリーンというの？(篠崎一雄)／ケガをしてもちゃんとなおるよね！(阿形清和)／クジラはどこから来たの？(岡田典弘)／組換え食品は安全なの？(渡辺雄一郎)／細胞の中って見えるの？(永井健治)／薬はどうやって創るの？(吉田 稔)

分子生物学に魅せられた人々

四六判 縦組 約 300ページ 2011年4月刊行予定

創立 30 周年を期に、分子生物学が今日に至った道筋を、記憶の奥にしまいこまれてしまう前に記録することは重要と考え、日本の分子生物学の小事を書き留めることにしました。本書は、分子生物学進歩の臨場感を味わっていただけるように、我が国において分子生物学・分子生物学会の創立・発展に貢献した下記 14 名の方々に、現在第一線で活躍中の研究者がインタビューをし、まとめたものです。

富澤純一／岡田吉美／村松正實／志村令郎／吉川 寛／松原謙一／小川智子
堀田凱樹／柳田充弘／竹市雅俊／谷口維紹／岡田清孝／田中啓二／長田重一

21 世紀の分子生物学

A5 判 横組 2 色刷 約 250ページ 2011年10月刊行予定

各分野の第一線で活躍する専門家が、最新の論文情報や知見も含めて易しく簡潔に分子生物学を概説。コラムを豊富に挿入し、鍵となった歴史的な発見や実験などにもふれます。若い読者に“これなら自分にもできる、自分でもやってみたい”と思わせる一冊。

<生命の分子基盤> 細胞の構造と機能(大隅良典)／タンパク質、酵素(永田和宏)／代謝調節(門脇孝)／ゲノムと遺伝子(小原雄治)／RNA バイオロジー(塩見春彦)

<生命の維持と継承> 恒常性維持と細胞応答(加藤茂明)／細胞分裂(山本正幸)／癌(山本 雅)／発生・分化(近藤寿人)／再生(山中伸弥)／老化(石川冬木)

<生命のコントロール> 脳と神経(岡野栄之)／概日時計(近藤孝男)／植物のバイオテクノロジー(島本 功)／細菌・ウイルス・感染症(小安重夫)／創薬(辻本豪三)

出版社 東京化学同人に直接注文で、会員 2 割引

<会員特典> 日本分子生物学会会員が購入する場合、**定価の 2 割引**です。ただし、送料は冊数にかかわらず 1 回 200 円、海外への送品は実費請求となります。会員特典による頒布は東京化学同人への直接申し込みに限ります。書店・大学生協等では扱いません。東京化学同人のホームページ上に申込用紙がごございます。申込用紙をご利用の上、直接東京化学同人へお申込下さい。

The Molecular Biology Society of Japan NEWS

日本分子生物学会 会報

(年 3 回刊行)

第 98 号 (2011年2月)

発 行——特定非営利活動法人 日本分子生物学会

代表者——小原 雄治